睦月型えっち合同誌

R-18

小さくてもオトナだよ？

めんてい・処

漫画：ユメのオワリ

よよよぉ？
司令官がなんか
食べてるぴょん！

うーちゃんも
一口もらうぴょん♪

むにぃ

ひゃにひゅる
ひょんうぅ!?

なにやってるのー!?

にゃんにゃー

むに
むに

うぅ
ひょぁぁぁぁぁ!?

くぱ…
そんなケダモノしれいかんには…
おしおきぴょんっ！
しれいかぁ～ん！聞いたぴょん…
睦月型みんなに手を出しちゃったんだってぇ…？
ぷにゅっ
!?
ビクッ
ビクッ
な……ないぃ～。
……
弥生もしれいかんを懲らしめるぴょん！
カマ…
きっ…気持ちよくなんか…
わーもう堕ちてるぴょん!!
ぴくっ
ぷ
ぬぷぷ…
漫画：いまち

ってそんなに激しくぺろぺろされたら…

うーちゃんも…

ぴゅるるっ

ぴくっ

ぴくっ

ぴゅるるっ

ぴゅっ

ぴゅっ

ぴゅ

イラスト：黒崎まんぼう
IT

真面目な性格なので
たどたどしくも自分から
奉仕する三日月ちゃん。
丁寧で献身的な愛撫に
焦らされているような快感が生まれる。
提督と三日月ちゃんの夜の営み。
いつまで経っても初夜のように恥じらう。
よろしくお願いします
あ…
喉の奥に射精される三日月ちゃん。
射精中の敏感ペニスを
舌と喉で丁寧に尽くしてくれる。
三日月ちゃんの小さなお口では
全部受け止めきれずこぼしてしまう。
こぼれた精液を丁寧に舐め取り
匂いと味に恍惚の表情を浮かべる。
漫画：文鈎遠瑠

恥じらいながらも
自分から広げて提督を受け入れる三日月ちゃん。

羞恥で声を押し殺すものの、
何度も繰り返し開発された膣穴は
挿入の快楽で何度も達してしまう。

抱き上げられる三日月ちゃん。
普段気を張っている反動からか、
子供のように抱きついて甘えてくる。

快感に呼応するように膣肉が震え、
司令官のペニスに絡みつく。
導かれるように何度も
三日月ちゃんの最奥に精を放つ。

溶け合うような安らぎの中で
愛の言葉を囁き合う二人。

夜はまだまだ長い。

イラスト：えりある

イラスト：ひほり

暴発
ちょんちょん
ドキドキ

イラスト：祷

イラスト：ひなつきましろ

イラスト：ふれぁ

文月だよぉー

今日は護衛艦として司令官とお出かけなのー

ミーン ジー ジー ジー ミーン ジー ジー

わぁ…

鎮守府の近くにこんな場所があったんですねー

俺の秘密の場所だ誰にも言うなよ

特に大淀にはー

おさぼりですかおさぼりですかー？

ジー ジー ジー

う…うるさい!!

えへへー

司令官とのひみつの場所…

わぁ わぁ

俺はこの先の駐屯地で用事済ませてくるからお前はここで水浴びでもしてろ

えっ!?

◆描いた人　すか

で…でも司令官の前でお洋服脱ぐなんて…

？

でも…脱ぐのが恥ずかしいなんて言ったら駆逐艦(こども)のクセに変な子だって思われちゃうかな…

…って司令官いない!!

ちゃぷ ちゃぷ

気持ちいいなぁー

ジーー ジーー

今のうちに急いで水浴びして司令官が戻る前に服着ちゃおー

……

ぶるっ

おしっこしたくなっちゃった…

う…水の中でしちゃおう…
文月戻ったぞー
し司令官!?
やぁだぁ…あたし…司令官に見られながらおしっこしてる…!!
見ないで…!!
見ないで…!!
しゃあああ
どうした文月顔赤いぞ？
風邪か？
なんでもないれすぅ…

◆おしまい

はぁ…
さっちゃん…
はぁ…
あっ
ぴくっ
へへ
へへ
へへ
りっくん
ちゅぷ
しゅっ
イラスト：mou S

長月～暇だよ～

暇なら鳳翔さんのところか…間宮にでも行ってきたらどうだ？

え～長月と一緒がいーもん

ぐっ
ちゅう
ぴくっ
あ
おい
…

さ
つき

ト
ちゅ

ん？

せ、
……責任
とってくれるんだろうな
はーっ♡
はーっ♡

おおう…
勿論だよ…

あれー

ながながどうしたの？

ここ

？

…ん？

首

赤くなってるよ

はしっ

!!!

あっ…や、なんだろうな なんか虫にでも刺されたかな…

皐月のヤツ…

それはね～

僕のお嫁さんの印だよ!!

すよめさん

たまれ

足柄さん…俺…もう

今日は…コンドームつけなくても良いですよ…❤

？

へ？

私整備士さんの赤ちゃんが欲しいです…❤

……ってことは……？

はい…❤❤昨日のプロポーズお受け致します❤

漫画：しはちろ

ッ!!

あっおち○ぽ…おっきくなっちゃいましたね❤

う嬉しいですから…

ふふ❤

そう言う足柄さんも…おま○こグチョグチョじゃないですか…ッ

やだっ❤❤恥ずかしい❤

……我慢できない!!い挿れます!!

はいっ❤❤

ぶるッあ♡

足柄…さん…

ラブ♡

んッ♡あっそこ♡

ドキ

はあ…はぁ…

ドキ

あぁ♡

ドキ

あっ♡

整備士さん♡

……

ドキ

はあ…はぁ…

あっ♡ひくっ

って事をさっき廊下歩いてたら聞いちゃいまして

覗いてみたらこんな感じにしてたんです…❤

三日月ちゃん…ほ　ホントにコレで赤ちゃんが出来るのかな？

「おち〇ぽ」「おま〇こ」…そして「赤ちゃん」!!間違いないと思います！

ね…念願の赤ちゃん…

ケッコンすればコウノトリさんが運んできてくれるって聞いてたけど…

全然運んできてくれないからどうしたのかと思ってたら…

こう言う儀式が必要だったんだね…

提督……何だか身体が熱く…❤

ぼ　僕もちょっと変な感じ…ってアレ…何か…

え…？　あッ？？？

ん…あ　あれ？

腰が…勝手に…？

て　提督ッ!?だいじょ…

む…
胸のとこッ

胸のところ……
ふわって…ッ
ふわってしします❤

おち〇ち〇
じんじんするよ
……!!

わっ!!
ててて　提督！
おち〇ぽさっきより
膨らんでます!!

——んッッ❤
頭が…痺れて…
何…これ…ッ❤

儀式…凄い
何だか神聖な…
感じが…!!

ン…

頭…が…
真っ白…
……に!!

ドサ
最後…こうしてました❤
ドキ
…分からないですけど多分そうだと思います…❤
ドキ
そ…そうなんだ…儀式の締め…なのかな？
…コウノトリさんていつくるのかな？
赤ちゃんがくるまで十月十日って聞いたことあります…
え……結構長いんだね……
待ち遠しいですね……❤
ところでこの液体は…

漫画：めんていやくな

皐月とケッコンしてしばらく…

ぺたん

ぺたん

ぐぬぬ…

あはっ♥ 司令官！ボクね！またおっぱいが大きくなってきたよ！

うーん そうかなぁ…？ あとさ僕達…まだ職務中なんだけど…

えーっ 休憩だよ！きゅーけい！

皐月がなんだかえっちに積極的になってきました

こんなに恥ずかしいとこ見せられるのは司令官だけなんだよ？

むしろボクに感謝してほしいな！

まぁ確かに嬉しいけど…

司令官！

ボクのことぎゅーってして♥

わわっ…

ぎゅっ

皐月…

ホント可愛いな…

ん…？どうしたの皐月？

んっ 司令官♥ボクね♥イ・イ・こ・と思いついたっ♥

ねぇ！司令官？

もう少しだけ…そのさ…ボクと休憩していかない？

おくち楽にして…
ぷあっ
んっ
ちゅ…♡
んふふーむむーんん♥（司令官ぐ♥）
ミキ
ミキ
ミキ
ミキ
ミキ
んふふんふひひん？（たくしあげだよぐ？）
なに言ってるかわかんないよ皐月…ほら…
トロッ♡
皐月…ワレメがもうこんなにヌルヌルになってるよ
んぁ…だって…ボワ…夜まで待てないよ…♥
おくち…？お○んこ舐めればいい？
皐月はえっちでせっかちさんだね
司令官…もっとおくち…ほしいよ…♥
ん…違う…
くりっ
ぬるっ…♡

司令官…ボクにもっといっぱい…オトナのキスして♥
はぁ♥
はぁ♥
はぁ♥
はぁ♥
はぁ♥
とろっ…
はぁ♥
はぁ♥
はぁ♥
皐月…手だけでイっちゃう？
やだ…♥ボク…司令官のおちんちんでイきたい…♥
どうして欲しい？皐月言ってみて？
ボクのおなかの中…めちゃくちゃにしてほしいよ…♥
司令官…ボクのお〇んこにおちん〇ん挿れて…♥♥
とろぉ…♥
にゅるっ…
びくん♥

司令官…見えるかい？はやくはやく♥
ギキィ
ぷっぷっぷ…
びくん
びくっ
あっ…♥おちんちん挿入ってきたぁ…♥
はぁ
あっ
とろっ…
キュン
うっ…皐月の中…いっぱい濡れて気持ちいい…
ちゅ
ぐぢゅ
ずぷっ
ずっ

あっ…皐月…ごめん…もう…出るっ…

ボクもっ…♥気持ちいいの上がってくるっ♥

びゅくんっ

びゅくっ

びゅくっ

びゅくんっ♥

びゅくんっ♥

びゅくっ♥

びゅくんっ♥

びゅくっ♥

びゅくっ♥

びゅく

弥生は抱けて
うーちゃんは
抱けないぴょん？

なにが不満ぴょん!?
だって弥生と
ケッコンしてるし

弥生は…
いいよ卯月なら

ええ!?

し…しれいかぁ…ん
お…大きすぎるぴょん

大丈夫だから…
すぐに良くなる

卯月の処女まんこの
感触ずっと覚えてて
やるからな…

漫画：ロリコントラップ

こ…これが司令官の

ドクッ

ーちゃん感激…
ょん…

あっ…乱暴おちんちんが

気持ちよくて
い…イっちゃ

突き上げて
全身に響くッでも

んあ
あああ

イラスト：いそぽ

大阪屋うろ@nullpoplus

はぁっ
はぁっ
んっ……
もう準備できたから……挿れて？
んっ……
司令官の……膣内ですごい膨らんで……ッ！
あっ
あっ
おちん……ちんッ！ナカで……ぐりぐり動いて……ッ！気持ちイイッ♥
う……んッ！ここ……すき♥こつんこつんって
中出しは……ダメ……ッ♥おなかに♥あったかいの♥かけてぇ♥
はっ
はぁ
もう一回勃ったら中出し、してもいいけど
どう……する？
私のおっぱい……ちっちゃくて物足りないかもだけど……全部絞り出してあげる……♥
ぴゅっ
ぎゅー
ぎゅっ
ぎゅっ
ぎゅっ

ガチャ

艦隊帰投しました…

ボロ…

ボロボロじゃないかっ!? 大丈夫か?

やよいが大破したから…進撃できなかった…

やよい…装甲…薄いから…

…このままじゃまた…迷惑かけちゃう…

ペタ ペタ

し…司令官…あの…

ぬぎ

もじ もじ

や…やよいに…補強増設…してください…

はじめての補強増設

作・雨美すずめ

本当にいいのか？

…はい

ドキドキ

プル

プル

し…司令官なら…
大丈夫…だから…

ガク

ガク

あっ

ぐっ

…は…い…
おねがい…します…っ

はぁ

はぁ

プル

あっ

ゆっくりうごかすからな

ぐぽ

ぐぽっ

ぐぽ

ぐぽっ

ヌプ

ヌプ

プル

プル

ピト♥

それじゃあ
いくぞ

は…はい

ビク

ビク

ズズ

みちち

ぬちゃ

あ…っ

い…っ!!

ボーン

ズブ
ズブ
あっ
お…おくまで…
びく
はあ
ゆさ
ゆさ
ゆさ
増設…されて…る…
はあ

にゅぽ
にゅぽ
にゅぽ
にゅぽ
すこし速くするぞ
ふぇ…？
ガク
あっ…
やよい…もう…っ
あっ
もう少しだから頑張れ！
はあ
ズブ
ズブ
ズブ
ガク
しれいっ…かっ…
あ…あっ
はっ
あ
ぐっ

ビクッ

あっ

[redacted]

コプ

コプ

ビクン

とある
雑居ビルの一室

そこにとある
施設がある

そう・・・
この場所こそは・・・

睦月型風俗店である！

あっ
しれーかん

あっ♡

描いたひと あとのまつり

またきてくれたんだ～♡

今日はお気に入りの
文月ちゃんだ！

ぱぁ♡

きゅっ♡

!!

ちゅー♡

はっ

えへへ…

ちゅーしちゃった

かわいい…！

ドクン

かあっ…

てれっ

この両手の中にすぽっと収まるような感じ…

あぁ…癒されるなぁ…

わぷっ

ポフッ

ぎゅーっ

し…しれいか…

んむっ

しかもこの子たちはかわいいだけじゃない

すーっ…

しれーかんのにおい
かいでたら…
すごいどきどき
してきちゃった
どばーん
どの娘も
すごくえっちな艦娘なんだ！
どきん
だからね…
しれいかん
カチャカチャ
ジーッ
ごそ ごそ
今日は文月で
いっぱいいっぱい
きもちよくなっていってね？
ポロ…

ちいさなお口で一生懸命ぺろぺろしてくれてる…

体温が高いのか触れてるところがすごい熱い…！

れろ♡

はっ♡

ぴちゃ…♡

ちゅっ♡

ちろっ

ビクッ

ん♡

かぷ♡

くぷっ

んっ♡

う…ああ気持ちよすぎる…

どくどくっ…

はーっ

はーっ

こんなの…

我慢…できない!!

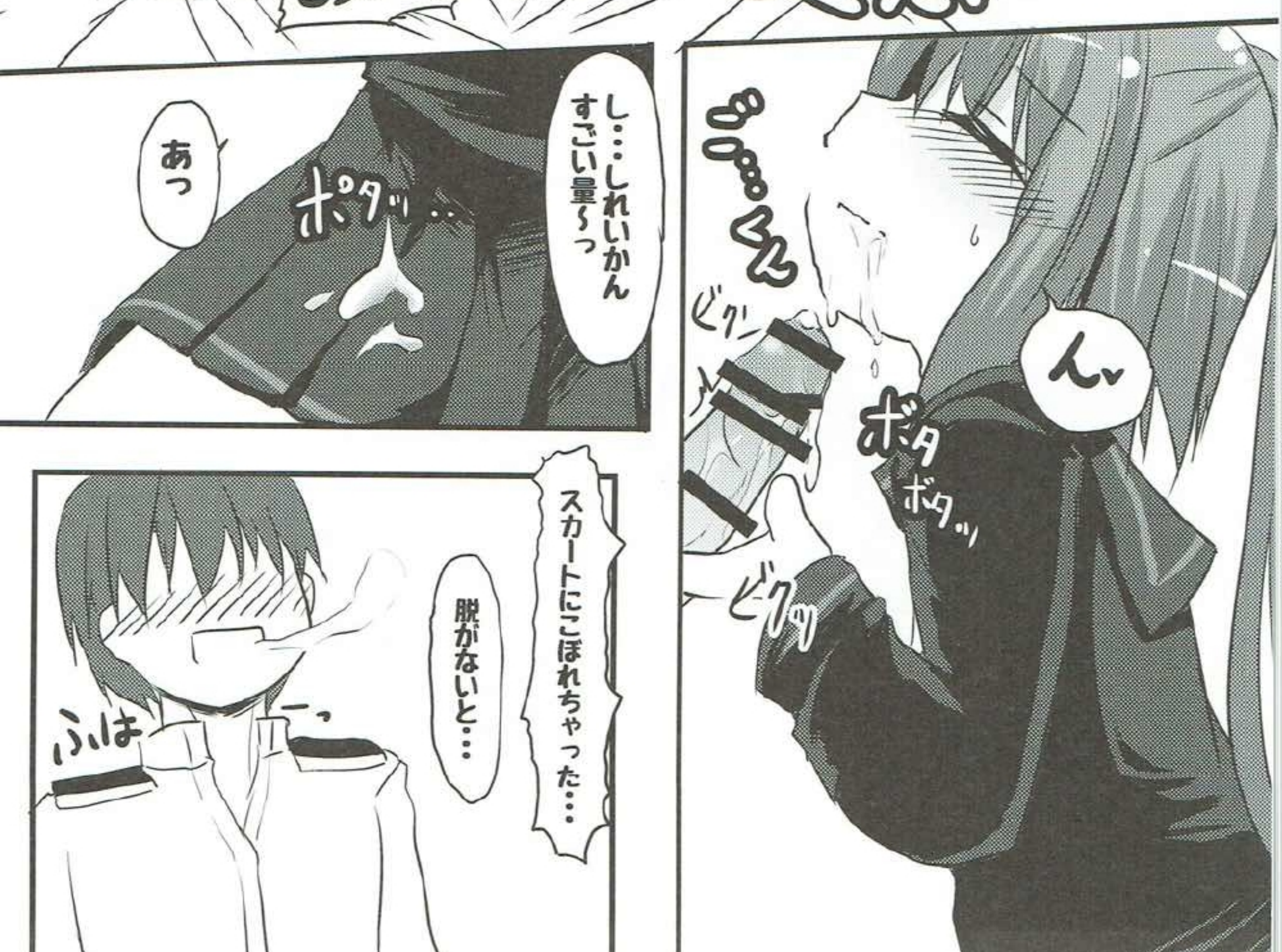
ん!?

ズドンッ

うっあ・・・
文月ちゃん・・・もう少し・・・で
出るっ・・・・・!!

ぱちゅ
ぱん
んぐ〜
ぐぽ
ぐぽ
ぐぽ

んぐ〜〜〜!!
どくん
どくん
ビュウ〜〜ッ



ぷりんっ
まる…
ひゅっ
まるっ
むら…っ
しれいかん、待っ…
ぶるっ
ぷるんっ!!
ぶるあぁそっ♥
ビクッ
え!? ええ~!?
!?
ビクッ

もぉ～、しれいかんがっつきすぎぃ

ごめん、文月ちゃんの着替え見てたらすごいむらむらしちゃって我慢できなかったんだ…

そ…そっかぁ

はーぁ

どくどくっ

あっ

はっ

あ

がまんできなかったならしかたな…

ない…

よね…！

ぱん

ぱん

すぐ

ビクッ

ぱんっ

トン！

ゆさ

びくっ

ずん

あぁ～

あ…おく…っ

はっ

ゆさ

あぁ

あぁ

はっ

ずっ

ぐりっ

ぐりぐりしちゃらめぇ…っ

ぐりぐりぐり

あ…

あっ あっ あっ

ぞくぞくぞくぞくっ

はーっ

はーっ

ぱんぱんぱんぱんっ!

ビクッ

ビュクッ

ビュクッ

ぱんぱんぱんぱん

ふぁぁぁあっ!!

にゅぽっ

ぷぷっ

あっ♡

はーっ♡

ぐちゅ

ぐぐぐ

ぐぐぐ

ぐぐぐ

出撃で失敗した
おしおきなのに…

これじゃおしおきに
ならないみたいだね

だって…
しれーかんのが
きもちいいから…

ぷっ

にゅぷっ

それじゃあ
もっと強くするよ

ふあっ♡

いくんっ

ふあっ
あっ♡

待っ、しれーか…

あっ♡だ、めっ♡えっ♡

そろそろ膣内に
キツいおしおき、
いっぱい射精すから…ねっ！

ぱっ

にゅちっ

ゆっ

にゅちっ

ぱっ

キュッ♡

ぱっ

ぱっ

んぁ♥
ぁ♥
ぱっ♥
ふぁ……っ しれーかんの…
はー♥
しれーかんのがびゅっびゅっってしてるぅ…
はー♥

…文月

?

はぷ

はぷ

今回の失敗、らしくなかったけど
もしかして……何かあった？

ぺろっ

ぱっ。

ん…ぷぁ

んーとねぇ……

しれーかん分の
補給が足りなかったかなぁ？

……まだ足りない？

うーん…
もういっかいしたいかなーって♡

しようがないなぁ!!

漫画：白端みずち

提督
睦月に話って？

それはな
睦月…

そう!!
私と睦月に
しかできない

とても楽しい
儀式だ!!

ううん

今日君を
呼んだのは

とある
儀式の為である!!

？

きしき？

と言うわけで
睦月
早速君と【性】なる
儀式を!!

これは君にしか
できない事なんだ!!

ごっ

ううん…

今日の提督
いつもより
三割増しで
おかしいにゃし…

ででも!!

…提督が睦月を選んでくれたし…一生懸命儀式をがんばるにゃし!!

…嬉しい

嬉しいぞ睦月…!!

ドキドキ

ガバッ

ん!?

んっ♥

あぁ…睦月のちっぱい…♥

ぷにぷにぷに

すごい…君はすごい艦娘だ

こんなにも私好みの艦娘がいるなんて…

あぁぁあん❤黒ストに素股最高だよお睦月ぃぃ❤

あっ

あ

コスッ

コスッ

はぁぁ

にゃ

にゃんっ

て…提督…にゃ…にゃんだかぁ変な気分にぃ❤

キュンッ

ぷにぷにちっぱいに黒ストとうるトゥルの生地感!!

にゃ

ぷにぷにぷに

ぶるぶるぶる

皐月とえっちえっち♡

ん～たーごろ

遠征の報告は以上だ

わかった
各自休憩にあたるよう通達してくれ

了解だ……
皐月の顔赤くないか…？

ボクは大丈夫だよ

長月こそ疲れてるんじゃない？
はやく休憩して来なよ

そうか…？

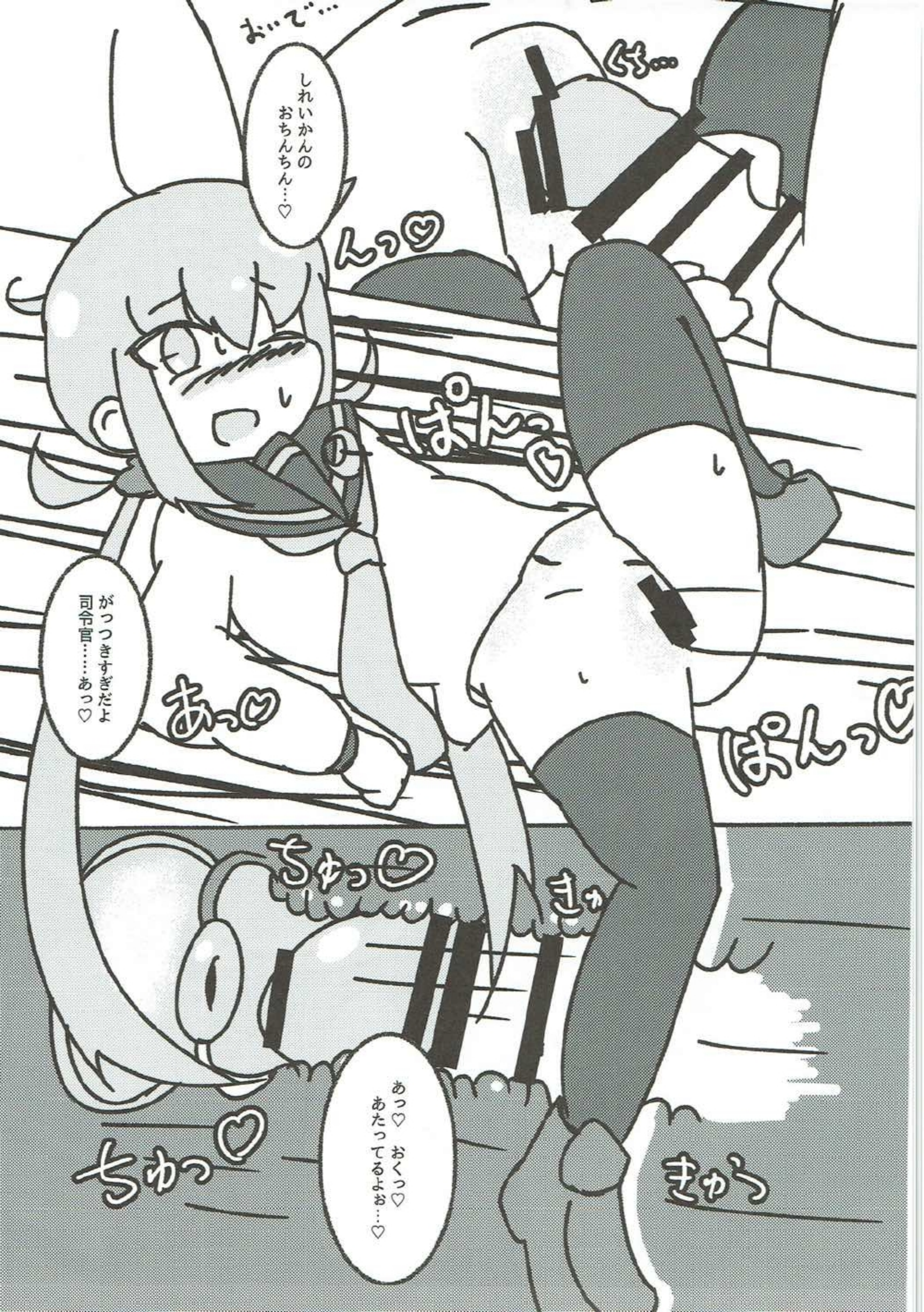
待ちきれないなんて
司令官は悪い子だね……

おちんちん

いいこ♥
いいこ♥

いいよ……♡
えっちしよ……

ぱくっ♥


おぉぉ…
しれいかんのおちんちん…♡
んっ♡
ぱんっ♡
がっつきすぎだよ司令官……あっ♡
あっ♡
ぱんっ♡
ちゅっ♡
きゅ
あっ♡ おくっ♡ あたってるよぉ…♡
ちゅっ♡
きゅう

あっ♡

あ、あ、あ♡

あ、あ♡

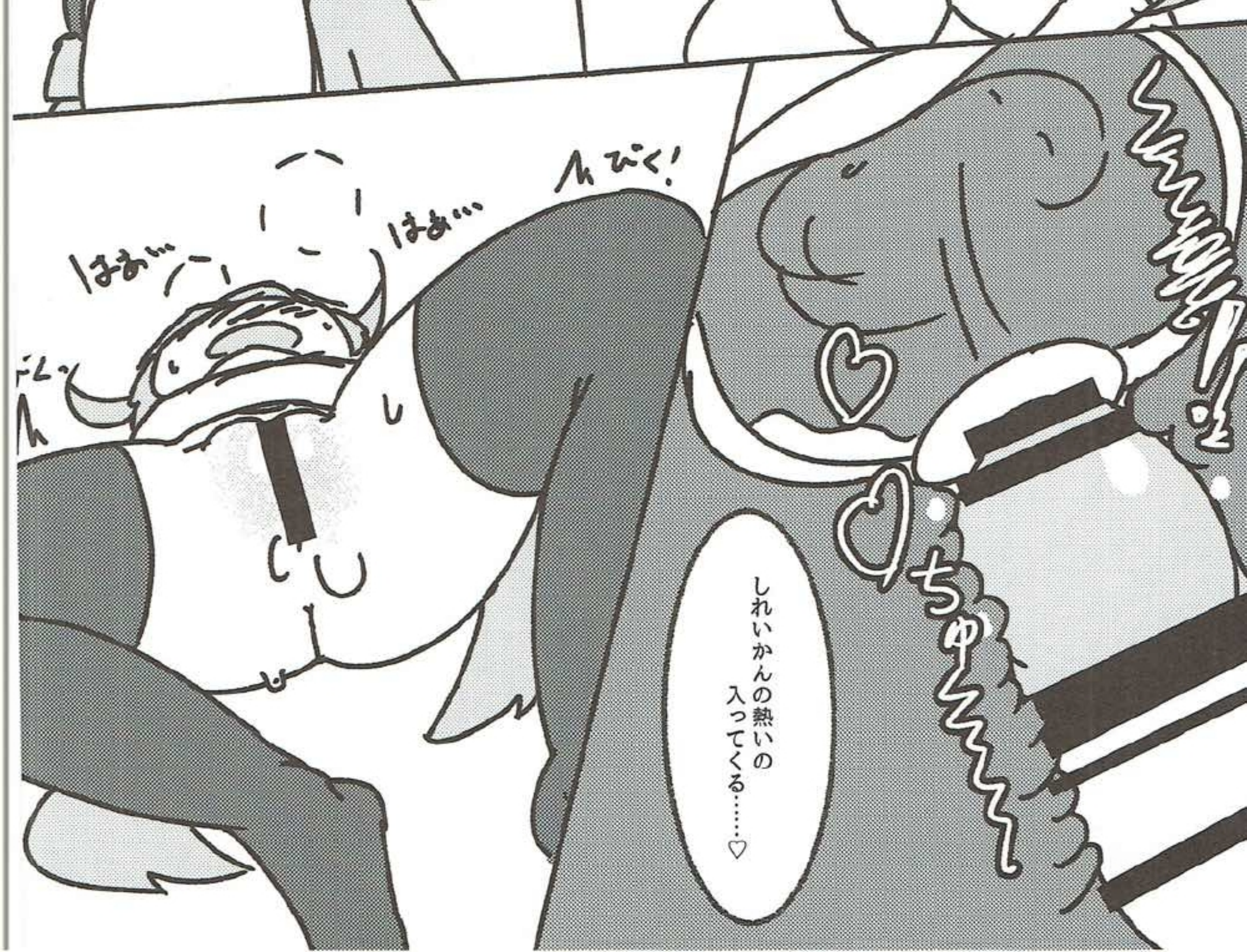
あっ♡

はげっしいよ
しれいかん！

ぱん♡

ぱん

イっちゃう！
ボクイっちゃうよ！



あっ♡

待ってしれいかん！
ボクイったばっか……？！

ぷりん♡

プニ

だめっ！だめっ！
そこボクのあかちゃんのへや……！

ゲゲゲゲゲ…

キュ～～

ビ！

イッ

イッ

キュ～～

ポッ♡

がっ…がっ……

カーリ…

キュッ♡
キュッ♡

ちゅぱ!
トクン。
トクン
オッ…
オッ…
ちゅぽん♡
おわり

…望月
そろそろどいて
くれないか？

んー？
これ倒し
たらねー

あとちょっと
だからさー

漫画：おちょん

もう日付
変わったし
そろそろ寝ないと
いけないだろ

あー
はいはい

それに俺
そろそろ限界
なんだよなぁ・・

4ラ

生殺しか!!

ニヤ・・・

スススッ・・・

ちょっと
だけ・・・

ん？
スリ
スリ
ちょおっと
どこ
さわってんのさ
ぴぎ
くぱぁ
望月ばっかり
楽しんでるのは
ずるいだろ？
ひあっ
だから俺も
楽しもうと
思って
ズズズ
ぷにっ
あぁ
ぞくぞくぞく

あれ？望月ゲームやらないのか？
ぐちゅ
ぬちゅ
ぬぶっ
もれちゃ…
もう
ぐちゅ
ぬちゅ

ぐぐぐ
ぴちゃ
ぴちゃ
ぴちゃ
ぐぐぐ

んんっ
よわわわゃ
はぁ…っ
びくんっ
びくんっ
もー！おしっこがまんしてたのに
ゲームもまけたし！
はははっ…
すまんついっ…
こーなったら
コトッ
さいごまで
きゅん♡
付き合ってもらうからね
ドキドキ♡
ドキドキ♡

漫画：豚たまご

提督ぅ
ぢゅ
ぢゅ
ぢゅ
提督ぅ…
弥生？
ビクッ
ごめんたな
さぁい…♡
ドキ
ドキ
また隠れて
角オナして
悪い奴め!!
角オナする為に
タイツを履かせた
訳じゃないぞ!!
ヒク
ヒク
きゅん♡
きゅん♡
トロォ…
ぼろっ

悪い子にはお仕置きだ!!
あっ♥
そこだめぇ♥
こんなに腫らして
提督ぅ…
はぁ♥
はぁ♥
とろぉ…
あぁ♥
提督ぅイっちゃうよぉ…
いっちゃうぅ♥
ぁあああんッ♥
ビクッ
ビクッ
ん？続き？

「艦娘は夢を見るか」

答えはYESのようだ

内容は人間のソレと大差ないが

やはりあの大戦の夢を見る者も多い

特に現在も艦体が残る娘は結び付きが強いのかよく悪夢を見るらしい

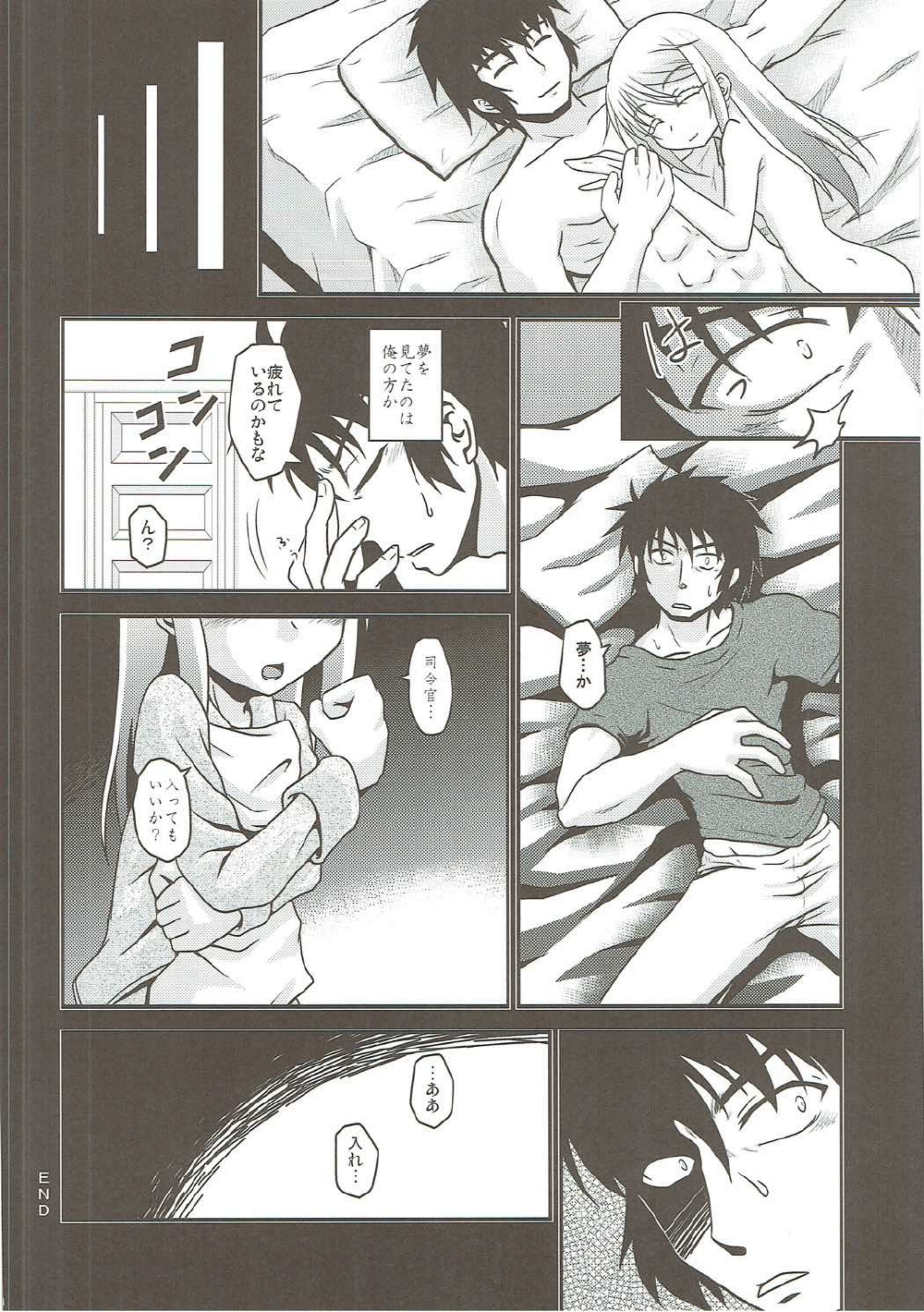
怖い…夢を…

菊月は艦の夢を見るか

楓蛙

その孤独が
朽ちていく恐怖が
菊月もその一人だ
彼女の艦体は沈められた後に引き上げられて徹底調査され
今も洋上に放置されている
司令官…
熱を求めさせるのかもしれない

司令官…
もっと強く…
強く抱きしめてくれ…
あ、
ああああ♡！



END

漫画：熊灯ツムギ

司令官

ガチャガチャ

軽傷の娘たちを最優先に入渠へ

睦月が残りますッ如月ちゃんは大怪我していてッ!!

ハァハァ

睦月ちゃん

貴方はまだ戦えるわ皆をよろしくね

如月ちゃんッ!!如月ちゃん!!

直ぐ迎えに行くからね!!

ドゴ

ドゴ

ドゴ

ーー

ンム

ギュ

司令官……!?

僕は何てことをッ!!

如月ちゃんの事が――

ごめんなさいっごめんなさいっ!!

き……如月も

どうかもう少しの間だけでもいいから

動いてー

レロレロ

司令官が

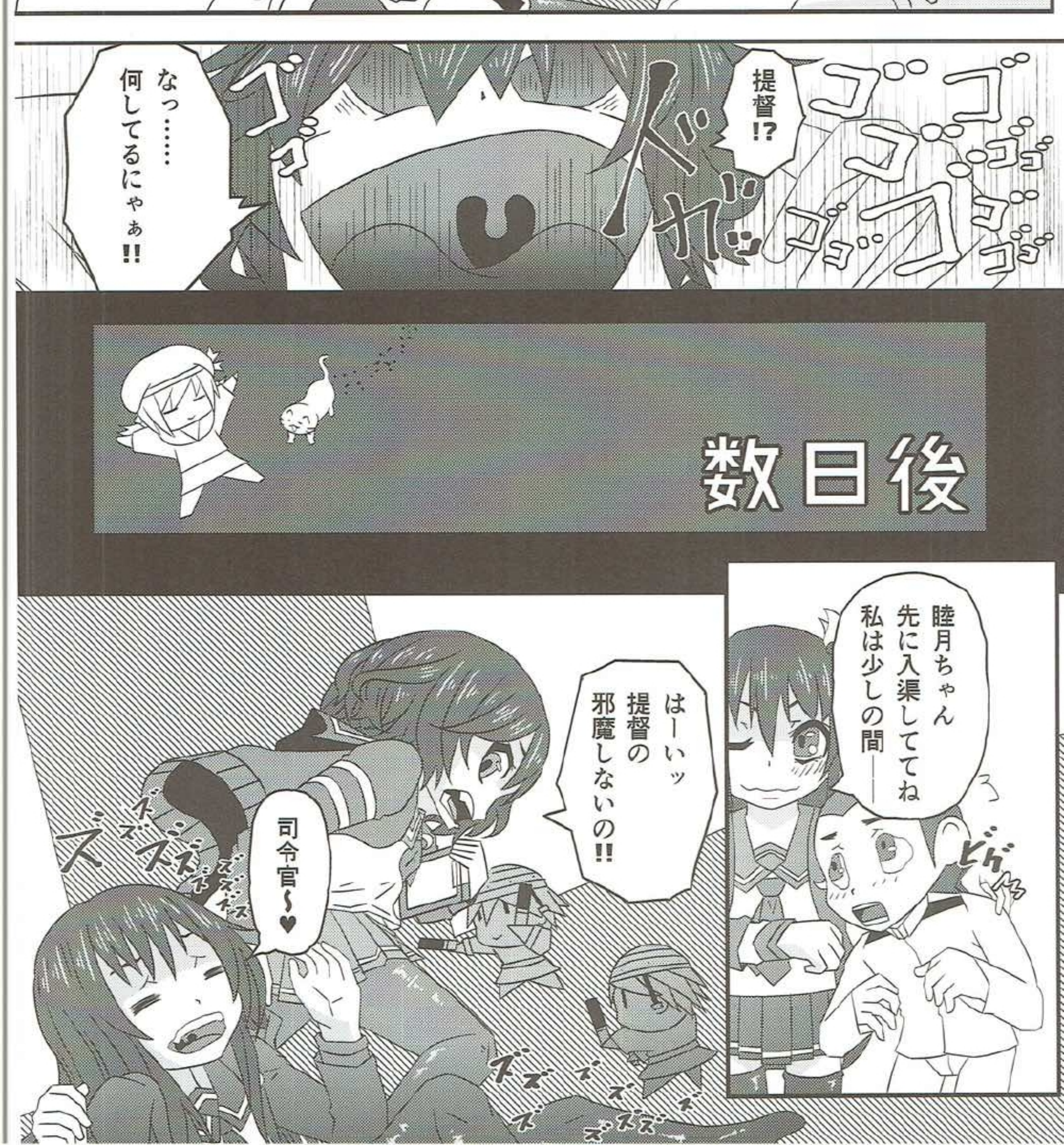
ズイイ

グイ

……欲しいの

司令官♥
司令官♥
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ムズ
私も一緒にイかせて……ねっ♥
パコ
パコ
パコ
パコ
ズン
ズン
ズン
ズン
ズン
如月ちゃんッ!!
ビグ
ビグ
ビグ
ビグ
ビグ
ビグ
ありがとう……大好きよ司令官♥
ドプ
ドプ
ドプ

ビグ
ビグ
ドン!!
如月ちゃん お待たせッ 空いたよ!!
ズブブ ズブブ
ビグ ビグ ビグ ビグ ビグ ビグ



提督が出版した長月研究本「長月のここが性感コマンドお」を手に入れたぞ！
なお長月の許可は得て無い模様！
デェェェェン!!
野郎オブクラッシャーッ!!
※野郎ぶっ殺してやる
長月のここが性感コマンドお！
何が始まるんです？
長月エロ同人だ!!
作：マンガをうpする人！
ちょ、ま、嘘!? 当たってるう?!♥
ビクッ♥
おいおいそんな本信じるn…
この本によると長月の性感帯はぁ…
こ・こ・か・なぁ♥
ひっ!!
ワォ♥
キョンキョンキョンキョン
※この先脱ぐシーンが無いから無理やり透過したサービスカット↑→

長月の弱いところ②『耳、とくに耳孔周辺を攻められること❤』

くぽっ…

にゅぷっ♡

んっ♡

長月の弱いところ③『フトモモの付け根を指でやさしく焦らす』

いあぁっ♡

ふふふ…効いてる効いてる❤

長月もしかして結構Mッ気ある？

ちょぷっ…

いやっ

あ♡

いあ♡

あ♡

くりっ♡

くりっ♡

すっご…本の場所攻めるとドンビキするくらいヌれちゃってる…

てか提督の予測的確過ぎてヒいちゃうなぁw

なんか長月の声聞いてたらボクも興奮してきちゃった…

ちょっと
フトモモ
借りちゃうね☆

スル…

な…なにを…

んう?!

ふふ…
パンツ履いてたら
汚れちゃう
とこだったよ❤

んッ…
長月のっ
厚めなタイツ…
摩擦が…直接う…
すっごいコレ…っ!

チュプッ♡

チュッ♡

これじゃ
ボクもすぐ
追いついちゃう❤

それじゃあ…
フィニッシュ
イっちゃおうかな

プぷ…♡

気の強い女は
『ココ』が…って
本に書いてあるよ

ゾク…

へ…
変なトコに
入れるん
じゃない!

そんな
言って…

あ…
カワイイ
反応❤

期待してる
くせに…

ほら

イッちゃえ

あっ♡

ビクッ

ゾクッ

ジンジン

ぬいぬい

ズブッ

ハァ

ハァ

ズ～ン

後ろでイかされてしまった…

？

…ってあれぇ？この本だと…

ドッ

イった時は「おちんぽミルク出ちゃうぅぅ～～～♥」って言うと…

おちんぽ汁でるこ～～♡

出るかぁあぁいッ!!

終わり

おっ…提督！

そんな乱暴にしちゃ…っ

さわっ

さわ

こらっ

@マルム

「けっきょくさからえない、長月ちゃん♡」

やっ

くいっ

くいっ♡

やめてっ

ビリ

ビリ

あ

ずぷっ

あー

ずぷぷぷっ…

あ～っ♥

ずぷ

10分経過

あ

ぱんっ

ぱんっ

あっ

30分経過♡

んっ

ぱんっ

あ

ぱんっ

50分経過ー❤❤

あ

あ

どくどくっ

びゅ

びゅ

あああんっ

提督…私は

はー

役にたっているか？

はー

ちゅっ

ん♡

たってるよ♡

また明日へ続く❤
❤END❤

『ちょっとHな？なかよし睦月っ子』　柴犬きせつ

ま…まさか

今日のお昼ご飯も…

今日のお昼ごはんもそうめんですよ！

どうでもいいけどお前あたしのこと踏んでんだよ！

ガーン

4日連続にゃし！

えぇ～!?

ごめんなさいもっち!!

ばっ…

ん～…まぁやるすー

い…今はお昼ごはんの話をしている場合じゃありません！

場合にゃし！そうめんは飽きたよ！

バイバイ

とにかく！この雑誌をみてください！

皐月のおふとんの下からなんと…

えっちな本が！

WOW!

キャ

ええ～！

うっそだろー よりによって あのバカが…？

ガっ…！

そういうお年頃なんですかね～♡

お前の方があいつより年下じゃねーかよ

どれ どれ～

本当かよ…あいつはふとんの下にドングリしかいれねーだろー

おふとんの下にある本は絶対えっちな本なんですよ！見なくてもわかります！

見てねーのかよ！てかお前なんでそんなテンション高いの？

ちょっとふたりともこれを見るにゃし！

ふ…ふくろとじが

破られているにゃしい！

そして睦月はこの本にひじょーに！

見覚えがあるのです！

これは！睦月のコ○コ○コミックにゃしい！
しくしく
付録のカブトムシのレアカードが！睦月に持って行かれているにゃしい！

かぶとむしの
レアカード

こうしちゃいられないにゃしい！
改二パワー
バァァン
さっきイイ！

—その夜
どうしたの？みっか！
なんでもないです…

…
てぼ
ぁ…

fin♡

どうもこんにちわ
先日、この鎮守府に
着任した水無月だよ

祝！睦月型えっち合同！
ということで、みなさんは
もう抜けそうな睦月型は
見つけられたかな？

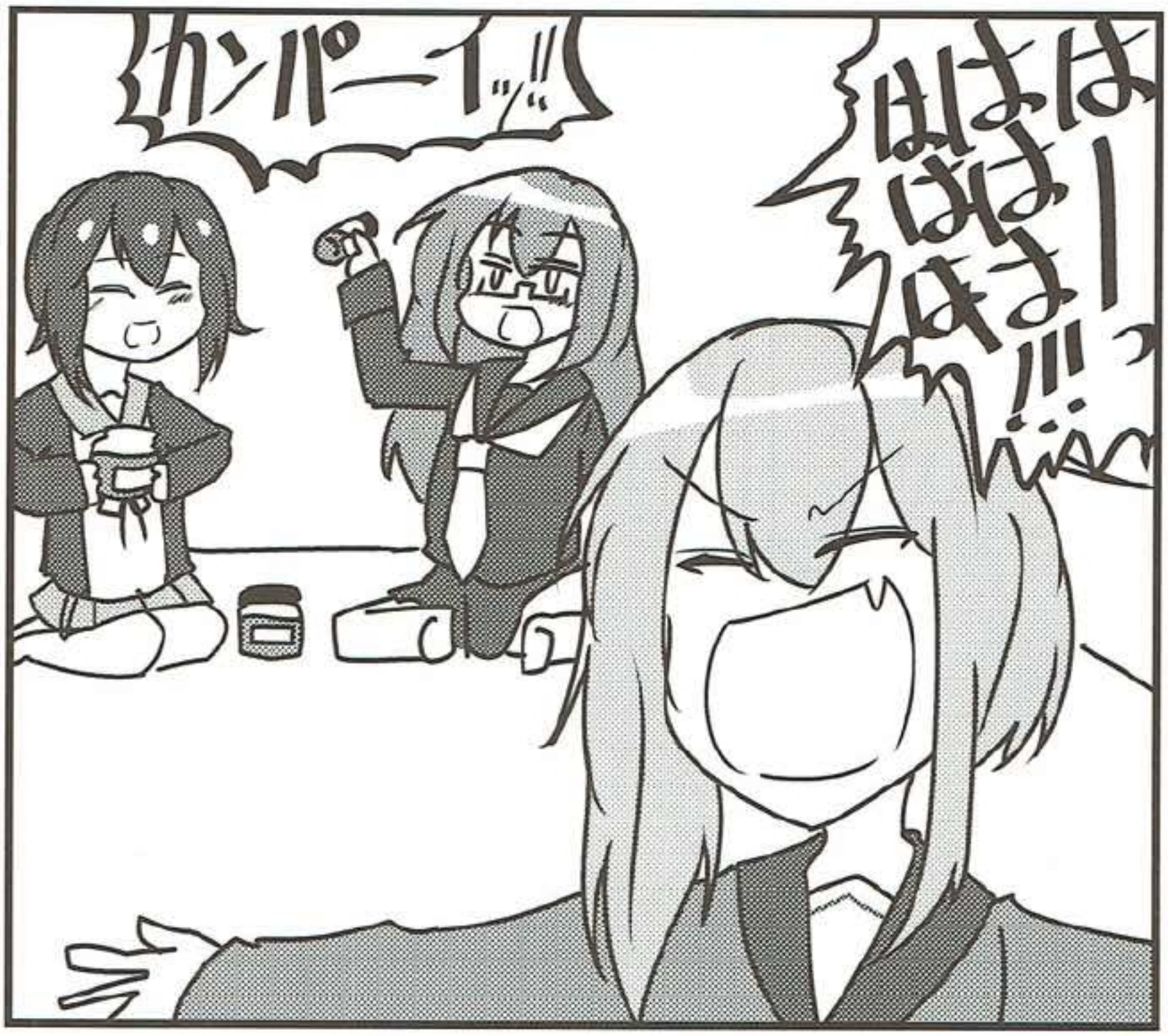
こちら！
ミナヅキ相談室！
描いたん：カイチョー

エロ合同なのにどんな始まり方
してんだ、と思うかもしれない
うん…わかるよ
でもこれには訳があるんだ

この…

ちゃぷんっ

『正真正銘100%淫乱メス豚化強制薬』を使ってね！



ゴクッ
ゴクッ
ゴクッ
ああ
なあ
あ前に
あらて
はあ
ああ
ダメ

ニャー
ボフッ
猫になる！
え!?

結局これかよ!?
なんで猫!?
せっかくの媚薬なのに!?
はわわわあ!?

ああああ♥
ちょっとあたしも
やばいかも♥
なっちゃう♥
変態メス豚になっちゃう♥
どうせもっちーも
猫になるんでしょ！

なっちゃうううううう
ボフッ
なす～ん
動物ですらねえ！

そういう問題じゃないよ！

は…？ナス…!?

おいおいあたしナス嫌いなんだよなるならトマトとかにしてくれよ！

もういい…

がしっ

道具に頼ろうとした水無月が悪かったんだ…

こうなったら…

いまからナスもっちーでオナニーしまーす♥♥♥

もっちー♥合体(セックス)しよ♥

エロ合同何だから合体(セックス)くらいしないとダメだよ♥

ハァ♡

ハァ♡

おいやめろふざけんな！あたしをオナニーの道具にすんじゃねえ!!ばか離せ！あたしはバイブじゃねえ！

ぽ
ぷぷ
ぷぷ
ぷぷ
あ
もしゃあ
もうだめだ
合体完了！
望睦月（もちむつき）！
ぷぷぷ
ぷぷぷ
ぷぷぷ
合体の意味
おまい！

漫画：ぎょん

やったぁ！
でたっぴょん！

卯月でっす！
うーちゃんって
呼ばれてまっす！

ぴょーん

ちんぽでっす
ぽんちゃんって
呼ばれてまっす

まぁ落ち着くんだ、
これは日本古来からある
裸の付き合いというもので、
初対面の卯月と
早く打ち解けたい
という一心で、
恥を忍んで
このような手段を
とったというワケだ

ビクン
ビクン

ぐすん

なんか釈然としないけど
なるほどがってんだぴょん

いきなり何を
出してるっぴょん!?
ナニがでたっぴょん！

プル
プル
プル
プル

うるせぇぴょん!!

誤解も解けたようだし、
仲直りの握手をしよう！

はいだぴょん！
このあとめちゃくちゃ
ぶっかけた

ゆッ

にゃしッッ……!?
ぼろん
ビクッ

もぅ～
司令官ったら
こんなもの出して
如月にどうして
ほしいのかしら？
ドキドキ
ぴゃっ

司令官の
おちんちん
相変わらず
かわいいなぁ！

ええ……
しおぃぃ

司令官
おちんちん
しまってよぅ～
ぴーん

もしもし
憲兵さんですか
プルルルル

もうっ……！
司令官には自然で
いてほしいけど、
いくらなんでも
おちんちんは
出しちゃ
だめですよっ……
もじ
もじ

漫画：鈴鷹美樹

おしまい

2016.12.2

イラスト：キンニック

ん……し、司令官っ……

ぴくっ

そんなっ……に……！

激し……くっ

なめ……ないでえ……！

ぴくん

ぴくん

もう ビクッ だめっ…!

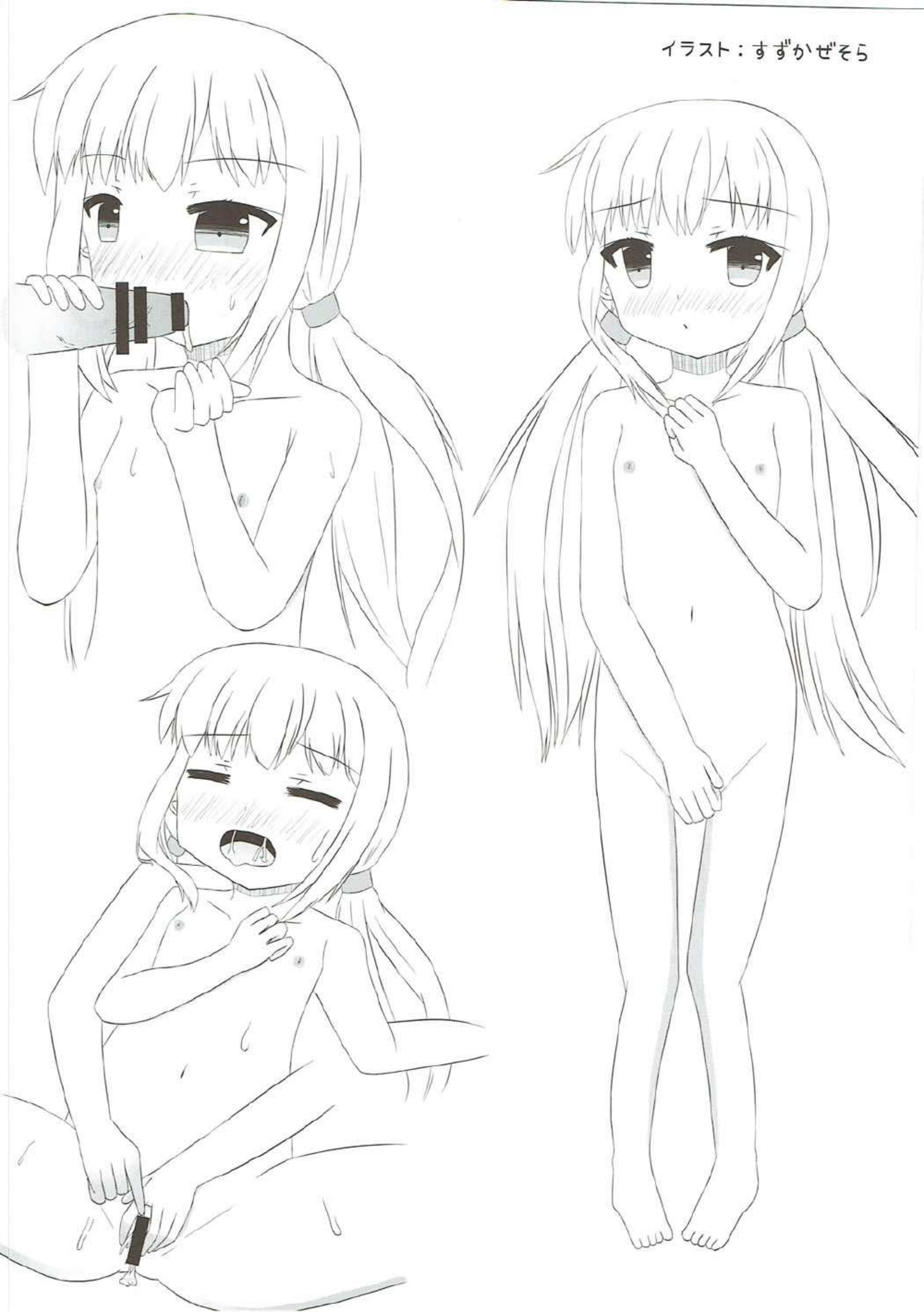
司令官の…かおつにっ…

おしっ…こ ビクッ!?

で…ちゃいま…すっ

しゅあああ…

イラスト：すずかぜそら



ビキ
ドキ
ドキ
ドキ
ドキ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
Alt
+
E4

イラスト：ミュウ

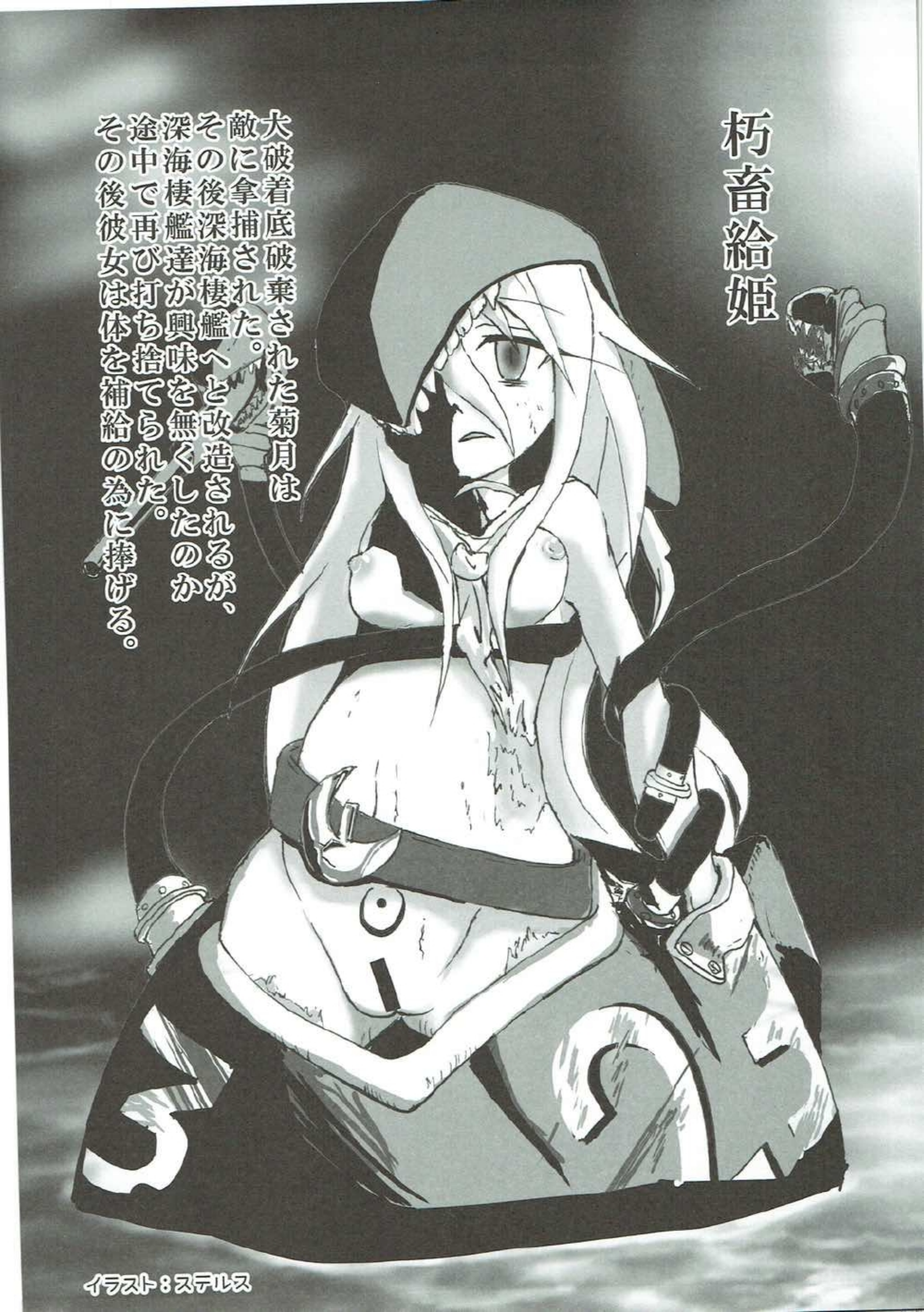
イラスト：有葉米太

イラスト：寺田

イラスト：白狼姫

朽畜給姫

大破着底破棄された菊月は
敵に拿捕された。
その後深海棲艦へと改造されるが、
深海棲艦深海棲艦のなかで興味を無くしたのか
途中で再び打ち捨てられた。
その後彼女は体を補給の為に捧げる。



イラスト：ステルス

イラスト：azumaya

ヤドリギの下で

NUUNO

店から出ると光に包まれた。灰色のビルが立ち並ぶこの街もクリスマスシーズンが到来し色を持つ。クリスマスまであと丁度一週間、日が落ちた今はより一層鮮やかな光だ。

ところどころ店の前に置かれたクリスマスツリーが輝き、通りの店は全て個性豊かなイルミネーションが飾られ、葉が落ちきった街路樹でさえもイルミネーションが飾られている。どこからか流れてくる『恋人のクリスマス』のオルゴールがまた雰囲気を作り上げている。

街にいる者たちは、例えばサンタクロースの恰好でクリスマスセールのチケットを配る者、恋人と手をつないでイルミネーションと一緒にショッピングを楽しむカップル、はしゃぐ子どもと父親と母親が笑いあっている家族、いつもよりも街はより一層賑やかとなっていた。

俺もまたその街の一部となっていた。忙しかった秋の出撃が終わり、また鎮守府も周辺警戒と遠征が中心となる期間に入る。基本的には休みとなる期間が始まった、そのため提督である俺もこうして街に出ることができる。

しかし街に出ているのは俺だけではない。俺の隣には頭一つ分と少し程度背が低い、黒髪の女性がいた。鎮守府の頼れる秘書官、三日月だ。今日は海軍指定である黒いセーラー服ではなく、白い襟付きの赤いリブニット、ミディアム丈のベージュのフレアスカート、その上にキャメルのダッフルコートを着ている。黒いタイツとファー付きのムートンブーツが小さな歩幅でついてきている。

せっかく張り切っておめかししたであろう三日月に対し、海軍服にコートという仕事上がりの自分の格好が恥ずかしく思ってしまう。自分の首には今年三日月からプレゼントされた赤いマフラーを巻いてある。三日月も同じ色をしたマフラーを巻いており、おそろいだ。

三日月と恋人の関係になって四か月が経った。今日の外出は明後日に忘年会として行われるクリスマスパーティの買い出しのためだ。足りない人数分のお菓子の買い出しに三日月と一緒に来ていた。

俺は右手にお菓子を、左手には小さな恋人の手を握って街を歩く。久しぶりのデートで、三日月は嬉しそうに握っている手を前後に揺らし続けている。イルミネーションに彩られた街は去年よりも光量が増しているように見えた。

「今日はありがとうございます、本当は私だけ行こうとしていたのに……」

「丁度やるべき事が終わっていたしな、三日月と久々に外出したかったのもあるし」

「ふふっ、ありがとうございます」

三日月は俺に向けて笑顔を向けた。照れているのか少し顔が赤い。買い物は終わったためこのまま鎮守府に戻ればいいのだが、せっかく街に出たのだから街を歩くことにした。

「綺麗だなぁ、今年は去年以上に綺麗だ」

「ですねぇ、見ているだけで楽しいです」

三日月と談笑しながら街の通りを歩いていると、港に出た。昼は連絡船やフェリーの客とその観光客で溢れている。夜になると美しい夜景が見られるということで観光客がよくいる。実際に、冬の夜だがそれでも彩られた今だけの景色を見ようと何人かいる。

俺と三日月は港を歩きながら夜景を眺めた。湾を囲むように街が出来ているため、半円状に光の帯が出来ている。どこもクリスマスムードで、まるで港の横に天の川を横たわらせたようだ。

「わぁ！すごくきれい！」

「だな、とても綺麗だ」

立ち止まり、横に並んでいる三日月の腰に手を回す。手をつないでいた時よりもさらに体が接する。三日月もそっと俺の腰に手を回し、頭を肩にくっつけた。三日月の体温と甘い匂いを近くに感じる。そしてゆっくりと港の遊歩道を歩いていた。

「あ！」

三日月が急に声を上げ、ある方向を指さしている。指している方を見ると、葉が落ちきったはずの街路樹の枝に、球状に葉が密集している。

「ヤドリギじゃないですか？あれ」

「詳しいな三日月、名前は聞いたことあるけど実物を見たのは初めてだ」

三日月が子どものように得意げに笑顔を向けてきた。

「如月姉さんが詳しくて、それでいろいろ教えてもらったんです！」

嬉しそうに言いながらスマホを取り出すと、ヤドリギを撮影し始めた。こうした、時々見せる三日月の子どもっぽいところがまた可愛らしかった。

俺はヤドリギを見てあることを思い出した。我ながらなかなかに恥ずかしいことだが、このタイミングを逃してはいけないと感じた。俺は三日月が満足し撮り終わったところを見計い、話しかけた。

「三日月」

「はい、どうしました？」

俺は三日月を抱き寄せ、腰に手を回した。幼さの残る小さな顔が近づく。漏れた吐息が顔にかかり、三日月の驚いた双眸と俺の目が合う。

「え！？きゅ、急にどうしたんですか！？」

右手で優しく三日月の綺麗で柔らかい前髪を左右に分けた。視界が三日月だけになり、世界が二人だけになる錯覚を感じる。

「こういう話を知っているか？『ヤドリギの下では恋人は絶対にキスしないといけない』」

自分がこれから何されるのか分かった三日月は目を強く瞑り、口を一文字に結んだ。三日月とのキスは何度もしているが、三日月はまだ慣れてないようである。

右手で三日月の顎をゆっくりと持ち上げた。三日月の長いまつげが小刻みに震え、顔にうっす

らと汗が見える。そういう自分も心拍数が上がり、自分の心臓の音が聴こえそうなほどだ。慣れてないことはするものではない。

自分も目を閉じ、そのまま三日月の唇に重ねる。緊張で強張ってた三日月の唇は次第に解れ、唇にマシュマロを当ててるような感触になる。

しばらく甘い時が流れた。そっと唇を離し、同時にゆっくりと目を開けた。三日月と目が合った。しばらく見つめあった後、三日月は口に手を当てながら笑った。

「ヤドリギの下でキスなんて、まるでオモチャの映画か魔法使いの映画ですね」

「これでも結構勇気を出したんだぞ？こんなドラマみたいなことするの」

少し怒りながらも、笑いながら言った。三日月はまた鈴を転がすように笑った。そして三日月はまた俺と目を合わせた。

「そう言えば、こういう言葉もありますよ？『ヤドリギの下では女性からキスができる』って」

そう言いながら三日月は俺の頭の後ろに腕を回し、唇を重ねてきた。つま先立ちになっているのか、三日月が少しふらついた。俺は腕に力を込め、三日月を抱きとめた。三日月が自分に体を預ける体勢になり、これ以上にないほど体が接する。小さな体の重みといっぱいに広がる甘い香りを強く感じる。小鳥がついばむ様に唇を重ね続けた。

やがてまた体を離し、見つめ合った。そしてまた一つ考えが浮かんだ。機会を伺っていたが、渡すにはこのタイミングしか無かった。今までに感じたことのない緊張が襲ってくる。

「三日月に渡したいものがある」

俺はポケットから小さな黒い箱を取り出した。

「え？」

俺は目の前の小さな恋人よりも背が低くなるように、片膝を地面についてから両手で箱の中を見せた。

「三日月……、俺と、ケッコンしてくれないか？」

三日月はしばらく固まった後、だんだんと理解をしてきたようで、驚きで目が見開いた後、両手で顔の半分を覆った。そして体を倒すように頷いた。

「……はい！」

涙を流しながら笑っている三日月は、強くそう答えた。

鎮守府に戻ってきたのはそれからしばらく経った後だった。長い間街にいたため、帰り着いたのは夜遅い時間だった。艦娘が住む寮と自分が住んでいる宿舎と別れているためここで別れることになる。

「それでは司令官、今日はありがとうございました、もう遅いのでこれで……」

三日月が笑顔で別れを言おうとした。

「なぁ三日月」

「はい？」

俺は三日月にそれ以上言わせないよう遮った。

「今夜、俺の部屋に来ないか？」

「え！？」

三日月は声を上げた。三日月は視線を外し斜め下の地面の方に向ける。身が縮こまり右手の人差し指と親指が一番上のボタンを右に回したり左に回したり忙しない。そして俺の方をちらっと見た後、顔が隠れる程俯き、頷いた。

宿舎はマンションの一室のようである。リビングは広く、キッチンもあり、書斎やバスルーム等々一人暮らしには持て余しそうな作りだ。

三日月には替えの制服を持って来るよう言い、帰ってくる前に先に自分がシャワーを浴びた。なるべく早く出るようにしておいたが、パンツをはかずバスローブ姿でバスルームを出ると玄関にまだ靴を履いたままの状態で、緊張しているのか替えの制服を胸に抱えたまま目を合わせずにもじもじしている三日月がいた。

「上がっていいぞ」

「は、はい……」

「荷物はリビングに置いていていい、あと俺のバスローブが中にあるから使ってくれ」

「わ、分かりました」

「それと……上がるときは下着をつけない方がいいと思うぞ」

「……はい」

最後は弱弱しい返答だった。自分も三日月に行った後に、本当にするんだと、どこか夢を見ているような感覚になった。

三日月がシャワーを浴びる音が聞こえる。リビングにあるソファーベッドに腰を掛け待っている。すごく長い時間のようで、早くシャワーから上がって欲しい、いやもう少し長い時間浴びていていいという二つの心情が入り混じり、落ち着くことができなかった。

やがてシャワーの音が消え、少し経ってバスルームから三日月が出てきた。貸したバスローブは自分が着れば膝にかかる丈だが三日月には大きく、裾が床を少し擦っている。三日月のへそ下辺りに帯が着ているため胸元が開くのか、体を隠すようにバスローブの襟を両手で持ち、体を縮ませている。

三日月はバスルームから出てすぐのところで立ち止まっており、耳元まで赤くなった顔でちらちら自分を見た後、意を決したかのように歩み寄り、俺の隣に座った。

「……」

「……」

バスルームから水滴の音が聴こえそうなほど静かで気まずい空気が流れる。とりあえずこの

空気を何とかしなければ。
「えっと、三日月、どうしようか……」
三日月は小さな体を震わせているが、少し間を置いた後口を開いた。
「せっかく勇気を出してここまで来たのに……」
目を合わせていないが、頬を膨らませながらジト目で言った。
そうは言うが、これからすることへの緊張と、三日月への愛おしさがぶつかり、くらくらして酔いそうだ、既に男根はこれ以上もないほどに硬くなっている。
「じゃあ、もうしていいのか？」
「じゃないと……困ります、もう戻ろうにも戻れませんよ……？」
そうだよな、もうここまで来ているんだ、このまま戻ったら後悔しか残らないだろう。俺は意を決した。
三日月の頬をそっと触り、俺の方を向かせた。そしてガラス細工を扱うように、優しく撫でながら唇を重ねる。
「んっ……」
三日月から自分の使っているシャンプーの匂いが漂ってくる。それだけでも、胸の奥から眠っていた野性的な支配欲と独占欲が沸き起こっていくのが分かる。やがて唇が離れた時、三日月の甘い吐息が俺の顔にかかった。その瞬間に沸き起こっていたものが一気に理性の天井を突き抜けていった。
「えっ、ちょっ……待っ……！」
有無を言わせずに三日月をベッドにゆっくりと仰向きに寝かせ、そのまま覆いかぶさるように自分も体を倒す。少し乱暴気味に三日月の唇を奪い、その小さな体の温度と感触を体全体で感じるよう、足を絡ませ、指を絡ませ、体を擦り合わせる。
「あっ……はぁ、あぁ、んちゅっ……」
時々三日月から息が漏れるが、そのたびにまたさらに性欲が強くなっていく。小さな口の中に舌を差し込んだ。
「ん～！にゃぁ、ちゅっ……はぁ……！」
その中の小さな舌が、応えようと必死に絡みついてくる。春の芽吹きと共に出た雌雄の蛇のように、口の中で互いを求め強く絡み合った。口から息が漏れ、それが次第に荒くなっていくのが分かる。俺は右手を離し、三日月のへそ辺りを探る。すぐにバスローブの帯を見つけ、ゆっくりと解いた。
「ちゅっ、んん……あ、司令か、ん……」
口を離し、バスローブの襟に手を添えた。三日月は薄く目を開け惚けている。口元にどちらかのか分からないよだれがべっとりとついており、二人の口をつなぐように糸を引いている。
まるで脆く壊れやすい物にまとった包みを取るようにバスローブを脱がす。言った通りに下着は付けていなく、三日月の白く細い身体が露わになった。お椀を胸に付けたような双丘はまだ未熟で手に収まってしまうほどに小さい。桜色をした乳輪には豆のように小さな乳首がある。三日月は恥ずかしそうに胸を右手で隠した。
「えっと、すみません……、私、胸が小さくて……」
俺は三日月の頭を撫で、軽くキスをした。
「気にしなくていい、むしろ俺は好きだぞ？」
「も、もう……」
正直なことを言ったのだが、三日月は恥ずかしそうに目線を外した。
胸を隠している三日月の右手を持ち、胸から剥がし、横へ持っていった。そして右手で三日月の右胸に触れた。温かな豆腐を触っているかのように滑らかでやわらかい。その感触を確かめるようにゆっくりと胸を揉む。
「んんっ……」
揉み始めると少しだけ三日月が反応した。漏れた声を聴くと少しいたずら心が芽生えた。
舌を出し、三日月のへそ近くから左胸まで、三日月の身体の凹凸を味わうように、舌を這わせていく。
「し、司令官……！くすぐったい、です！」
三日月の小さな抗議の声を聞きながら乳輪までたどり着くと、今度は乳輪に沿って円状に舌を這わす。
「はぁ……はぁ……！」
三日月の呼吸がだんだんと荒くなっている。
今度は舌先だけで乳首を弄ぶ。出るはずのない三日月のミルクを吸い出すように口で乳輪を覆うほど吸い付き、口の中でも乳首を弄び続ける。
「あぁっ！……んん！や、やめ！ひゃぁあ！」
声を漏らした三日月は、性的な興奮が高まっているのか弄っている乳首がだんだんと固くなってきていた。
「三日月……、ちゅっ、れろっ、気持ちいいか？」
「な、なんかっ、んん！ぞくぞくってして……！あぁ！」
三日月もだんだんと性的な興奮が高まってきているようだ。口を胸から離し、三日月のバスローブを剥ぎ取る。自分が着てるバスローブと一緒にベッド近くの床へ投げ捨てた。互いに一糸まとわぬ姿となった。
そして起き上がり、股間の方に目を持っていく。膣から愛液が溢れ、すでにベッドを濡らしていた。毛の生えていない無垢な割れ目がひくひくと震えている。亀頭を小さな膣口に当て、今にも力を入れてしまえば入っていきそうな体勢にした。
「入れるぞ、三日月」
「……ま、待って！」
「どうした？」
「えっと……その前に……キス、もう一回してください……」

俺は三日月の頭を撫で、落ち着かせるように唇を重ねた。
「あむ……んちゅ……くちゅっ、んん……！」
三日月が必死に唇に吸い付いてくる。キスをしながら腰を落としていく。ぬるっとした感覚がする。まるで自分の局部だけ湯船に浸けたように、温かいものが包み込んでくる。
「あ……あぁ—んん……！い、痛い！」
互いに敏感な部分の粘膜が溶け合うように擦れていく。痛がる三日月には申し訳ないが、感じたことのない性的快楽に腰が砕けそうだ、自分を制御するのが難しい。
「んん……！ちゅっ、んちゅ……ぷはぁ、ぁん……！」
三日月は痛がりながら必死に耐えるようにキスをしてくる。俺はきつくもぬるぬるとした感触に理性が完全にやられ、腰を打ち付け始める。
汗と唾液の匂いが入り混じる。てらてらと唾液で光る口元は幼い顔立ちでもいやらしく、背徳的な感情が沸き起こっていく。少し顔を離せば結合部からは雌の匂いが漂ってくる。粘着質の湿った音と荒くなっていく二人の息と喘ぎ声が大きく聞こえる。
「うぁ……くっ……！三日月ぃ……！」
「あぁぁあ—ふぁぁっ、ん……ああぁっ」
激しく、卑猥な音を立たせながら腰を懸命に振る。カリで膣壁をかき、三日月の小さな子宮を突いた。そのたびに膣はピストン運動を繰り返す男根を絞め、搾り取ろうとしてくる。
三日月は目を閉じしっかりと俺の体にしがみ付いている。腰を俺の動きに合わせて動かし、摩擦を強くしてくる。
「はぁ……！はぁ……！な、何か、変な感じに……」
互いにそろそろ限界だった。膣壁が痙攣し始め、込み上げてくる射精欲で抽送が激しくなる。
「くぅっ—そろそろ出そうだ！」
「え、え、な、何が、何が出るんですか……？」
三日月が質問したが、その言葉に答える余裕はない。一滴も漏らさないように三日月をしっかりと抱き、ラストスパートをかける。
「あっ、あっ、あっ！激しい！激しいです！」
そして男根を締め上げるように膣が窄まっていく。それとほぼ同時に三日月の膣の中に精液を吐き出した。
「ふぁっ、あぁぁぁぁぁ！あぅぅ……な、何か、何か入ってくる……！」
深く男根を挿入し、子宮口に亀頭がくっつく形で射精した。射精するたびに三日月の体が跳ね上がる。脈打つ男根は三日月の中に精液を吐き出し続けた。
「はぁ……はぁ……何か、中ですごくびくんびくんって……ふぅ……うぁ……あぁ、やっと、止まった……」
互いに肩で息をしている。柔らかくなった男根を膣から引き抜くと、膣から白く粘性のある精液が溢れてきた。
落ち着いたのはそれから少ししてからだった。まだお互い裸で、俺は横になって三日月を抱きしめ、小さな背中や柔らかな黒髪を撫でていた。三日月も大分落ち着いてきたようで、俺に身をゆだねて今は腕の中で落ち着いている。
「すまない、最後ちょっと激しくし過ぎた……」
「大丈夫ですよ、あぁでも……」
「ん？どうした？」
「でも、一番の問題は、その……中に出しちゃったってことなんですが」
「ん？あー俺としてはいいことだと思うんだが」
三日月はため息を吐いた。
「赤ちゃんが出来たらどうするんですか……」
「責任は取る、ていうか、もうケッコンするのに」
「まだ赤ちゃんはいいです、もう少し経ってからでお願いします！」
「えー俺は欲しいのになあ、三日月との子ども」
「もう……」
しばらく沈黙があって、三日月がぽつりと呟いた。
「そりゃあ、司令官の赤ちゃんは欲しいですけど、でもまだ司令官とだけ愛し合いたいというかなんて言うか……」
「え、なんて？」
「何でもないです—」
「赤ちゃんは欲しいけどもっといちゃいちゃしたいだって？だったら今から二回戦でも」
「聞こえているじゃないですか！」
「いてっ」
三日月から軽くたたかれた。それからしばらく三日月と話していた。今までの事、未来の事、二人で笑いながら話す時間はとても幸せだった。
これからも、この幸せが続きますように……
三日月とケッコンする一周間前の事だった。

ここしばらく、司令官と私は、恋仲の男女らしいことを、まったくと言っていいほどにしていない気がする。少し前に、不意にそんな思考が頭に浮かんでからというもの、どうにも気になって仕方がない。

「どうかしたのか、そんな思い悩んでいる顔をして」

その通り、思い悩んでいるんだ――とは言えず、「なんでもない」とだけ答えて、レーンを流れゆく寿司ネタから目についたものを取る。

休日の夕食を、一緒に過ごす。それは、恋仲の男女らしい行為と言えば、そうかもしれない。私たちの歳の差に、回転寿司屋という店の選択も相まって、周囲からはよくて兄妹、下手をすると親子連れに見えているであろうことに目を瞑れば、だが。

「しかし、またこんな風に気軽に寿司を食べられる時代が来るとはね。ああやって戦ったのも、無駄じゃなかったと思えるよ」

「案外、規模が小さいな……」

「そりゃあ、直接生活にかかわる部分なんて、規模が小さいことがほとんどだしね」

他愛もない会話をしながら、食事をする。別に、そのことについて不満はない。恵まれすぎていると感じるくらいだ。

「食べないのか？」

「……いや、今食べる」

しかし、私が悩んでいるのは、そういうことではない。そうではなく、恋仲になった男女がする、こう、夜の、その――

「どうした、わさびが多すぎたか？　すごい表情だぞ？」

「へ、平気だっ！」

――ああ、もう、まったく、なにを考えているんだ、私は！

まるで欲求不満みたいじゃないか！

しかし、一度気にしてしまっては、どうにも頭から離れないし、そういう行為が私たちの間で久しく行われていないのは、確かに事実なのだ。

原因はなんだろう。時間がない、というわけではない。こうやって一緒に外出できるくらいだ、時間的余裕はある。

次に考えるとすれば、司令官が、私への興味を失なったという可能性か。あって欲しくはないが、ない、と断言はできない。

「……なあ、司令官」

「どうした、長月」

「その……司令官は、今も変わらず、私のことが、す、好きだろうか？」

少々恥ずかしいが、思い切って尋ねてみた。

「……随分と、藪から棒な質問だけど、答えは分かり切ってるだろう？　好きに決まってるじゃないか。というか、好きでもなければ血縁でもない人間と、わざわざ同じ屋根の下で過ごす趣味はないよ」

「そう、だよな。うん。すまない、急に」

戦争が終わって、ただの一般人に戻った私は、司令官と一緒に暮らしている。司令官は、私の後見人ということになってはいるけれど、だからといって一緒に過ごす義務があるわけではない。しかし、司令官は自ら同じ家で生活することを提案してくれたし、今日に至るまで追い出すような素振りを見せたことはない。なんとも思っていない相手にそんなことをしないだろうというのは、確かにその通りだ。

なにより、司令官は思い違いはよくするし、誤魔化すこともままあるけれど、嘘は言わない人だと、私はよく知っている。

そうなると、他には――

「……まさか」

「うん？」

「ああいや、独り言だ」

思わず声に出てしまうくらい、嫌な予感がした。まさか、司

令官は――成長してしまった私の身体では、興奮しないんじゃないだろうか。

「さっきから、変な長月だなぁ……」

早くも五皿目に手をつける司令官を横目に、考えを巡らせる。

司令官はロリコンだ、それは間違いない。よしんば本人が否定しても、当時二桁にようやく届いた程度だった私に手を出した時点で、言い逃れなどできない。つまり、司令官は小さな子どもに興奮するはずで、私はもうその枠から外れてしまったのではないだろうか？

実際、最後にそういう行為をしてから、一年以上は経っている。その間に、多少とはいえ背も伸びたし、僅かだが胸も膨らんだ。まだ子どもが作れる身体でこそないが、どこまでが許容範囲かはわからない。

「だとすれば、どうしたものか……」

注文したサーモンを頬張りつつ、私は思考を続けるのだった。

◆◆◆

食事中、そして食後帰宅し今に至るまでの間、ずっと考え続けたが、他に理由は思いつかなかった。司令官はきっと、成長してしまった私の身体に興味を惹かれないのだ。

「はあ……」

非常に困った。身体の問題とあっては、私にはなんともしようがない。いくら自分自身の肉体とはいえ、そんなところまで制御することはできない。

「どうすれば、いいんだろうな……」

まだ本人の口から聞いたわけではないんだし、さっきみたいに直接尋ねてみるか？　いや、いくらなんでもそれは恥ずかしすぎるし、もし肯定されたら立ち直れる気がしない。とすると、司令官のほうをどうにかすればいいのだろうか？　成長した身体でも、興奮するように。

……いや、それこそどうすればいいんだ。快感で虜にする、とか？　だとしても、それにはまず行為に及ばなければどうしようもないわけで。だとすれば、無理矢理？　でも、艦娘だった時であればともかく、今は司令官のほうが力は強いはずだし――などと、私は悩んで、悩み抜き、そうして、一つの案を捻り出した。

――寝ている間に何度も犯して、司令官の身体に刻み込んでやれば、自然と今の私の身体に興奮するんじゃないかという、側から見れば馬鹿馬鹿しさすら感じる案を。

しかし、私は本気だ。当日の夜、早速実行に移すべく、消灯後に狸寝入りを決め、隣の司令官が寝静まるのをじっと待ち続けた。そうして、体感で数十分は経ったかというあたりで、寝息が耳に入る。行動開始だ。

私は布団から這い出して、すぐ隣の司令官にかかった掛け布団をゆっくり剥がす。司令官は、下着姿でぐっすり眠っていた。薄着なのは好都合だ。まずは自分自身のズボンとパンツを脱ぎ、それから司令官のパンツに手をかける。司令官の眠りは深いほうだから、ちょっとやそっとでは起きないはずだが、念のための警戒をしつつ、ゆっくりと下ろしていき――そうして、司令官のモノが露わになった。当然ながら、硬さはなくそのままの行為は不可能だ。

「こうするのも……随分と、久しぶりだな」

軽く、握ってみる。勃起中とは打って変わり、柔らかく細いそれは、まともに目にすること自体が久々だということも相まって、どことなく物足りないような印象を抱かせた。こんな程度だったか、司令官のは？

まあ、何はともあれ、勃たせないことには始まらない。握る手に少々力を入れて、上下に擦ってみる。すると、手のひらの中のモノはみるみるうちに硬さを帯びていき、限界まで怒張す

るのにそう時間はかからなかった。
「これは……その、なんというか」
直前まで抱いていた感想と、全く別の感慨を覚える。でかくないか、これ。こんなものが、私の中に――いや、入らないはずはないんだが。一年以上は前に、入り切らないとはいえ受け入れられていたものが、今になって挿入できない道理はない。
「……んっ」
――とはいえ、準備には念を入れるべきだろう。
「んっ、んんっ、んくっ……！」
自身の秘部を、指で弄って濡らしていく。司令官を起こさないように、なるべく声を抑えつつ、陰核を弾いたり、摘んだり。
「あっ……あ、んっ、ああっ……！」
ある程度湿り気を帯びてきたところで、膣に軽く指先を挿入し、軽く回すようにほじり、快感を得ていく。
「くっ……ふぅ。こんな、ところだろう……」
十分に濡れそぼったところで、手を止める。あくまでも準備運動であって、達するための行いではないのだ。そもそも、今回の目的は、司令官に快感を与えることなのだから、私一人が気持ちよくなっても全く意味がない。
「……いくぞ」
膝立ちの姿勢で司令官の身体を跨ぎ、ゆっくりと腰を落としていく。そうして、ぴとり、と秘所にモノの先端が触れ――
「――ああっ！」
――瞬間、体重をかけて、一気に咥え込む。思わず、声が出てしまった。司令官は……大丈夫、起きていない。
前屈みになって、結合部を覗き込んでみる。まだまだ未成熟と言っていい私の秘所だが、昔よりは深く、司令官のモノを受け入れていた。目測で、三分の二強といったところか。
「さて……動く、からな……」
起こさないように、小声で呟く。本当なら、声にする必要なんて、ないのだけれど。
「うつ……くっ、ああっ……！」
久々だからだろうか、感じられる刺激は昔以上だ。一瞬、本来の目的を忘れそうになってしまうほどだ。
「どう、だ……気持ち、いいか？」
返事はない。返されても困る。けれども、司令官に感じてもらえなければ、試みは失敗だ。
「ん……っ！」
肉襞と肉棒が強く擦れ、もたらされる快感に酔いそうになりつつ、腰を上下する。あまり大きく動きすぎて、私の浅い膣から抜けないように、注意しながら。
そうして、声を押し殺すようにしながら、ひたすらに動き続ける。月明かりだけが照らす静かな部屋に、しばらくの間、淫らな水音だけが響き続けた。
「ま、まだっ……なの、か……っ？」
――しかし、司令官はなかなか達しない。今どれほどの快感を受けているかはわからないが、男性が絶頂を迎えたかどうかは、簡単にわかる。まして、こうして繋がっているならば尚更だ。一方、私はと言えば、気を抜けば今にも頭が真っ白になりそうだ。
「は、はやくっ……！」
自然と、そんな声が漏れる。時間をかけすぎて、起こさないためか。達してしまえば、さすがに声を抑えられないからか。それとも、単に私がそれを求めているからか――もう、自分でもよくわからない。
腰の動きは、ただ上下させるだけではなく、ひねるようにしてみたり、ぐりぐりと押し付けてみたり、少しずつ変化していた。どちらかというと、それは快感を与えるためというよりは、得るための変化であるような気がするし、実際、いよいよ我慢の限界が近づいてきていた。

「しれ、か――っ！」
少しずつ、口から漏れる声が大きくなっていく。無意識に、腰の動きが大きく、速くなる。
「――っ！」
そんな中、膣内の司令官のモノが、小さくびくりと震えるのを感じた。
「そう、かっ……あんたも、もうっ、限界なんだな――っ！　いいぞ、一緒に――」
――そこまで口に出したところで、ついに絶頂に達する。
「ああ――っ！」
久々だからか、我慢を重ねたからか、視界が明るく弾けるような錯覚すら覚えるほどの強い快感が、意識を支配していく。そして、それとほとんど同時に、司令官のモノがびくびくと脈打ち、温いものが私の中へと注ぎ込まれていった。
「――ふう……っ、はぁ……」
そうして、繋がったまま快感の波が収まるのを待ち、落ち着いてきた辺りで呼吸を整え、さてそろそろ――と、腰を持ち上げようとした時。
「……ええっと、長月？」
――すぐそばから、困ったような調子で、私を呼ぶ声がした。

◆◆◆

「……その。どういうことなのか、説明して欲しいんだけど」
「い、いや、これはだな……」
司令官が目を覚ました後、私は返事もしないままいそいそと後片付けをし、素知らぬ顔で布団に戻ろうとしたわけだが、さすがにそうは問屋がおろさなかった。
「あ――あんたが悪いんだ！」
――だったらもう、全部ぶちまけてしまえ。

「こうして二人で過ごすようになってからというもの、私を求めてくることは一度としてなく！　もう、私の身体に興味などないんだろう！　そして、ロリコンのあんたのことだ！　今は確かに私のことが身体がどうこうを抜きにして愛しているのだとしても、そのうち好みの女児を見つけ、心もそちらに惹かれていくだろう！　だから私は、身体のほうで、虜に――」
怒りと気恥ずかしさとが一緒くたになった感情のままに、私は言葉をぶつけ――
「――×××」
――司令官が、××が、私の名前を呼んだ。
「君は、いくつか勘違いをしている」
この人がそうするのは、本当に、大事な時だけだ。
「勿論、勘違いさせてしまったのは僕の責任だ。だからこそ、説明する責任もある」
「勘違い、とは……どういう」
ついさっきまでの勢いはどこへやら、私はすっかり聞く姿勢に入っていた。
「まず最初に。別に僕は、君に興味がなくなったから、そういうことをしなくなったわけじゃない」
「そう、なのか……なら、なぜだ」
「……あの頃は、お互いに明日無事かもわからない身だっただろう？　更に言うなら、日常からは到底かけ離れた世界にいた。だから、と言っては言い訳かもしれないが、そういう行為をすることに、さほど躊躇いは感じなかった。けれど、今はどうだ。お互い平穏無事が保証されていて、しかも君は学生生活という日常の象徴のような世界にいる。そんな状況で行為に及ぶのは、君にとってあまりよくないんじゃないかと、そう思ってね。まあ……余計な気遣いだったみたいだけど」
少々ばつが悪そうに、司令官は頭をかく。

「その……なんだ。だから、君という人間そのものは当然として、身体のほうについても興味がなくなったわけじゃない。というか、そういう言葉はせめて月のものが来るようになってからか、もう少し背や胸が発育してから言うべきだと思うな」

そう言われてしまうと全くその通りで、返す言葉もなかった。

しかし、それならばよかった。そうか……私の勝手な空回りだったのか。

「そして次に。確かに、僕の女性の好みは一般的な平均よりもいささか幼い。ロリコンと言われても仕方はないだろう。だが——君のことは、そういうのは抜きで好きなんだって、昔、言ったと思ったんだけどな？」

「確かに、そうだが……しかし」

言われた記憶は、確かにある。けれど、いざ私が成長してしまった時に、どうなるかはわからない——そういう思いは、ずっと抱いていた。

「……そこまで信用ないのか僕は。なら、思い出してみてくれよ。僕がまだ提督だった頃、君くらいの歳頃の子は他にも沢山いたけれど、僕が君以外の子に手を出すことはあったか？」

「それ、は……」

私が知る限りは、ない。

「何よりも、だ。一度だって、僕が君に嘘を言ったことがあったかな」

——ああ、そうだ。そうだったじゃないか。

「わ、私っ——すまない！」

とっさに頭を下げる。嘘は言わない人だと、よく知っているつもりだったのに、自分で気づかないうちに、疑っていたとは。

「いや、謝るのは僕のほうだ。疑われるようなことをしたのは僕だし、ちゃんと、先に話しておけばよかった」

「だとしても、私はあんな……その、わけのわからないことを」

冷静になって思い返せば、私の思考と行動は支離滅裂にもほどがある。結果的に、司令官の気遣いを台無しにしてしまった。

「いいんだ、別に。確かに、目を覚ましたら馬乗りになられていた、なんて状況はなかなか驚いたけれど……あれはあれで、なんというか、悪く、なかったと、いうか」

司令官は、顔を背けつつ、徐々に小さくなる声で、そんなことを言い。

「……その。どうにも、余計なお世話だったみたいだしさ。どうかな、これからはまた、そういうことも」

照れ臭そうに、頬をかきながら、そう言葉を続けた。

「……変態ロリコンめ」

「ぐっ……でも、それを言ったら、人の寝込みを襲う幼女は変態じゃないのか？」

「それは……まあ、変態だな」

「なら、お互い様だ」

「そうだな、お互い様だ」

言いあって、私たちは目を合わせる。瞳に映る表情は優しげで、多分、私も同じような顔をしていたと思う。

「あんたがそのつもりなら、私に拒む理由はない」

「君がそのつもりなら、僕が我慢する理由もないな」

その言葉を最後に、布団に潜る。私ももう眠いし、司令官だって、睡眠途中に起こされて、眠くないはずがない。

「それじゃ、おやすみ、長月」

「ああ、おやすみ——と、そうだ。一つだけ、言い忘れていた」

「うん？」

顔を横に向け、目と目を合わせる。

「私も、ずっとずっと大好きだぞ、司令官？　——いひひっ」

「……はは」

私は、わざとらしく笑いかけ。

司令官は、恥ずかしげに微笑んだ。

——そんなある日の、夜の二人。

まどろみの中

モフースキー

男は疲れていた。
連日連日の会議、ただ上官が威張りちらすだけで意味もない。
其の後はこの無能上司と酒を飲みに、いや、酒を注がされに連れ回されて早や5時間。鎮守府に帰れば皆眠っていた。無理もない。もう深夜2時半だ。
「しれーかーん、おかえり！　どーだった？　お土産は？」
秘書艦の水無月だ。どうやら帰りを待ってくれていたらしい。残念ながら土産は買ってくる余裕もなかった。男は一言謝ると私室へと帰っていった。もう限界なのだ。
男は、布団に潜り込むとあっという間に眠りに落ちた。

翌朝、早朝5時。朝の早い艦娘はもう起き始める頃だ。
「あ、司令官まだ寝てるかも……しめしめ……」
そっと布団に忍び寄る小さな影。水無月だ。起こしに来た……はずなのだが左手にはペンを持っている。
「顔に…は、つまらないよね。うん。じゃあ……お腹に落書きしてみようか。えへへ、しれーかん、まだ起きないでね…！」
布団をゆっくりとめくっていく。起こさぬように。といっても男はまだまだ目覚める雰囲気はないが。
「うわっ、なにこれ……」
下腹部が盛り上がっていた。いわゆる朝勃ちというものだが、そんなものを水無月はまだ知らない。
「ちょっと……ちょっとだけだから」
ズボンを少し下ろしてみる。起こさないようにゆっくりと。好奇心はもう止められなかった。そのまま下着まで一気に下ろしてしまった。
窮屈そうな下着から解放されたそれは、力強く立ち上がった。
「すご……これって、おちんちん、だよね。ええ……こんなに大きいの？」

両手で顔を覆うようにするが、しっかりと男性器を凝視していた。性教育は受けていたし、外出時に道端に落ちていた本で少しは知識があったが実物を見たのはもちろんこれが初めてだった。
「せっかくだから……ちょっとだけ……いいよね？」
触れてみる。熱い。硬いような柔らかいような不思議な感触。握ってみると、軽くびくっと震えた気がした。
「なんかどきどきしてきたよ……起きないうちにちょっとだけいたずら、してもいいよね？」
小声でつぶやきながら少し上下に擦ってみる。以前見た本では擦ったり、口に咥えたりしていたのだ。
「これが気持ちいいのかな……ねえ司令官、気持ちいいの？　……って、起きちゃ困るんだけどさ。えへへ……」
不思議な胸の高鳴りを感じながら、ゆっくり擦ってみたり、先端を撫でてみたり……初めて触るおもちゃを堪能していた。
「なんか先っぽから出てきたけど……これがせーし？　じゃないよね。うーん……変な味。なんでこれを口に咥えたりするんだろ。でも……」
粘液を少しだけ手にとって口に含んでみた。変な味なのに胸が高鳴っていた。フェラチオという行為もよくわかっていないのだが、本で見た行為をしてみたい、その好奇心に負けた水無月は少しだけ口に含んでみた。
「ちゅっ……ちゅっ。うえ……変なの。でもなんだか、ちゅっ、じゅる……嫌いじゃ……ないかも……じゅっ」
水無月の小さなクチには入り切らないほどの大きさ。竿の半分ほどまでを口に含んでは舌で先端を舐めてみたり、上下に動いてみたり、それは眠っている彼にはたしかに快感として伝わっていた。
「じゅっ、じゅっ、じゅっ……ぷはっ、なにこれ……？　水無月までなんだか、変なの……」
気づけば履いていた短パンのジッパーを下ろし、下着越しに自分の性器をまさぐっていた。未熟ながらもたしかに愛液は溢れ出し、下着を濡らしていたのだ。

「なんだか、きもちいいかも……もうちょっとだけ続けてもいい……よね？　……司令官、起きないでよね」
短パンと下着を脱ぎ捨て、ワレメをいじりながらふたたびフェラチオを開始した。上のクチと下の口から水音が聞こえ始めているが、疲労して眠りについた男が起きる気配は未だにない。
「じゅぽっ、じゅぽっ……じゅるっ……ちゅっ。ぷはっ。なんかすごいよこれ。でも……これ、本当に水無月のここに……入るの？」
セックス自体は知っていた。が、左手でまさぐっている自分のここに、今右手が握っているこのそそり立つモノが入るのだろうか。考えながらも手でしごきながら、自分の秘部をいじることはやめられなかった。
「んっ、なんか変な感じ……なんか、こっちもびくびくしてるし……ちゅっ、じゅるっ……じゅぽっ、ぐぽっ……」
ふたたびクチに含んでみた。すでに射精寸前なのだが、本人は眠っており、愛撫している水無月も経験がないためそれには気づけなかった。
「じゅっ、じゅるっ……じゅっ、んっ、んんーっ！」
一度大きく震えたかと思うと、一気に何かが口の中に溢れ出してきた。今離したら布団まで汚れてしまうと考えると無理にでも口を離せなかった。
大きく射精した後、二度三度と性器が震え、残った精液を吐き出した。
「けほっ……けほっ……なんだよぉ……これぇ……うえぇ……これが、せーし？」
手元のティッシュを取り、口の中の精液を吐き出す。白い粘着く液体。愛撫により相手を絶頂させたたしかな証だった。……男はまだ起きる様子はない。射精の瞬間こそ顔をしかめるような表情になったものの、疲労もあり未だ覚醒にはいたらないようだ。
「あっ……ごめんよ、綺麗にするから……」
ティッシュを取り出し、竿周辺を拭っていく。のだが、また胸が高鳴ってきていた。
これを入れたらどうなるんだろうか。起きてしまったら怒られないだろうか。司令官の赤ちゃんができたらどうしよう
頭の中で考えていくが、何より勝るのは好奇心だった。もっとも、彼女はまだ孕むことはないのだが。
「司令官……ね、入れていいよね？　……返事ないから、入れちゃいまーす……」
男に跨り、自らの秘部を広げ、先ほどまで咥えていたものをあてがってみる。先端から少しずつ入っていく。先ほどまでの自慰行為でしっかりと濡れていたが、それでも大きさが違いすぎた。
「痛……なんだよもう……これ、本当に気持ちよくなるの？」
目尻に涙を浮かべながら時間をかけてゆっくり入れていく。自分の中が広げられていき、痛みを覚えながらも飲み込んでいった。
「っ……キッツいなあ……これ……うっ、んん……あ、奥……届いた……」
全てを飲み込むことはできなかったが、ついに膣の最奥まで飲み込んだのだった。竿を伝って破瓜の血が垂れているのだがそれに気付ける者はいなかった。男は未だに目覚める気配はない。
「えへへ……司令官と、えっち、しちゃった……ね、動くよ？」
眠ったままの相手に話しかけてみる。この状態で起きられても中断できないだろうが。
「じゃあ……動くよ？　んっ、んっ……」
ゆっくりと上下運動を始める。まだ痛むが、お腹の中で硬いものが動いている感触。一番奥をこつっ、こつっとつつかれる感触。何よりも相手を征服しているという状態が水無月を興奮させたいた。
「なんか、こういうの、んっ、いい、よね？ほら……司令官、今、んっ、水無月に犯されてるんだよ……今起きたら、んっ、どういう顔するんだろうね？」
起きる気配のない男に話しかける。心なしか苦しそうな表情を見せ、それがまた水無月を興奮させていた。
「んっ、んっ、ね、こういうのどう？」
上下運動だけでなく、左右に揺すってみたり、前後に動いてみたり……だんだん楽しくなってきたのか、動き方を変えることで表情が変わることが楽しくなっていた。

「あっ……今びくってした。んっ、まだダメだよ。司令官。」
一度腰の動きを止め、見下してみる。もともと遊ぶことやいたずらも好きな水無月だったが、もはや男は水無月にとってのオモチャと化していた。
「落ち着いた？　じゃあ、再開しようか。んしょ……んっ、んっ、あっ、なんだか、んっ、水無月も気持ちよくなってきた……かも。んっ」
愛液も増え、動くたびに卑猥な音が聞こえ始めていた。
「ねっ、んっ、ほら、水無月のここ、んっ、気持ちいい？　気持ちいいよね？中に出しても……いいよ？」
性器がびくびくと震えだしたことから察したのか、動きを速めて一気に精液を搾りだそうとする。
「ほら！んっ、ねっ？　んっ、んっ、我慢しないで、いいっ、から！」
水無月が腰を一気に落としたその瞬間、精液が吐き出された。
「ああっ……んっ……出て、あっ……これ、気持ちいい……」
膣奥に精液を感じながら、水無月も絶頂した。

「しれーかーん！　起きてー！　朝だよー！」
朝7時、いつもより少し遅い時間に秘書艦の水無月が起こしに来た。
「昨日遅かったから遅めに来たんだけど…大丈夫？　よく眠れた？」
いつもどおり優しく気を遣ってくれる子がそこにいた。熟睡できたと、そう伝えると水無月はいつものようにはにかんだ。
「えへへ……そう？　ならよかった。うん、朝ごはん作るから顔洗っておいでよ！」
二人で朝食を取り、スケジュールを確認する。今日もまた会議、おそらく同じ時間になるだろう。朝から憂鬱で仕方ない。
「遅くなるの？　うーん……今日はお土産、お願いね？」
忘れたらまた、いたずらしちゃうから。
小声で呟いた声は男には聞こえなかった。

時刻は日付が変わり、少し経った頃。部の艦娘はまだ酒盛りをしていたり夜戦と賑やかにしていて、彼女らのいると思しき部屋には、まだ明かりが灯っている。

そんな明かりのついている中のとある室。艦娘寮とは少し離れており、いくつも連なった窓に明かりが灯っている。そこは言わずと知れた鎮守府の中枢、執務室だ。遠征や出撃の報告、書類の処理など様々なことがこの部屋で行われているが、この時間においては任務とは関係のない、別のことが行われていようとしていた。

「……なー司令官」

「なんだ、望月」

「ゲームの邪魔なんだけど」

雑務を片付け、いつものごとくソファーでゲームをしていた望月の右隣にどっかりと座ると、左手で彼女の髪をサラサラと梳く。と、そう望月が小さく声をあげた。

「いいじゃないか。仕事で疲れた俺を労ってくれよ」

そう言いながら俺は髪を撫でていた手の人差し指を伸ばし、望月の頬をつつく。

「相変わらず望月はもちもちだなぁ」

「だから、ゲームの邪魔だって言って――」

そこまで言うと、彼女は急に黙り込む。と、ゲームから目を離し、俺の方をジト目で見つめてきた。

「……司令官、右手」

その理由はすぐにわかる。つついている左手とは逆の右手で望月の胸をセーラー服の上からだが揉んでいたからだ。

「ほら、最近ご無沙汰だっただろ？　だから望月のここも変わりばえなくもちもちしてるか確かめなければと思ってな」

「んっ……司令官、オヤジ臭いぞー」

そう言われつつも右手を止めろとは言われない。こちらから仕掛けるときはこうして軽くボディタッチで反応を伺う。拒否されないということは、オッケーのサインだ。……まあ、嫌がってもヤるときゃヤるんだけどな。

「……望月」

「……ん」

望月に呼びかけながら、左手を顎の下へと持っていく。すると彼女は小さく息を吐くと、ゲーム機を閉じて対面に置いてあるローテーブルに置く。それを見計らって俺は望月の顔をこちらに向けさせると、ゆっくりと押し倒しながら唇を塞ぐ。

「んむ……ちゅう……んぅ……」

そのまま舌を絡ませて、彼女の口の中をかき回していく。最初の慣れないうちは俺のなすがままにされていたが、幾度となく行為を重ねていくうちに、彼女からも積極的に舌を絡ませて、俺に合わせてくれるようになってきてくれた。

「ふぁ……んんっ……ちゅっ……」

もちろん、ただ俺はディープキスをしていたわけじゃない。胸を触っていた手でゆっくりと望月のセーラー服をたくし上げて、彼女の胸にある蕾に触らぬよう優しく丁寧に触っていく。

「ぷはっ……！」

と、ここで望月の息に限界がきたようで彼女は俺から顔を離すと、肩で息をしながら蕩けた目で明後日の方向に顔を向け、放心している。

「上脱がすぞ」

「ん……」

聞こえているのかはわからないが、ここから先には余計なものだ。俺はセーラー服の横のチャックを上げ、望月の両腕をあげると彼女からセーラー服を取り去る。するとそこには、触れてくれと言わんばかりに双丘の頂点に鮮やかな桜色をした蕾が二つ、ツンと勃っていた。

そして俺は、今度は両手で彼女の胸を弄り始める。だが当然彼女の蕾には触れない。その周りを指でなぞったり、揉んだりしていく。

「んぅ、しれーかん……あんま焦らさないでよ……っ」

「まだまだ、そうがっつくんじゃない」

ぴくりと身体を震わせて、望月は俺に言う。だが、彼女の欲望には従わず、俺は今のもどかしい攻めを続ける。

「ふっ……んんぅ……しれぇかん……！」

「……」

幾度となく小刻みに身体を痙攣させ、すがるような目と声で俺を揺さぶってくる望月。彼女の懇願するようなその表情だけでも理性が飛びかけ、今すぐ彼女にむしゃぶりつきたい欲望に駆られるが、ぐっと心を鎮め生殺しの愛撫を続けていく。

俺がなぜここまで彼女を責め立てるのか。その理由は、先ほどの口づけにも、このもどかしい焦らしにも表れている。俺たちは少なくとも、手で数えられないほどに身体を重ねてきた。が、初めて彼女と事に及んだ時から、俺は一つ不満――というと語弊があるのだが、疑問に思っている事があった。

彼女が声を出してくれないのだ。最初から今に至るまで、彼女のそんな声を聞いた覚えがない。最初のうちはまだこういう事に慣れてないのだから仕方がない、俺のやり方が悪いのだろうとも思っていた。が、回数を重ねるごとに彼女はむしろ声を我慢し、呼吸を荒げてさえ声を我慢しているという事に気づいたのだ。何故彼女はそうまでして、頑なに声を出そうとしないのか。そこで俺は彼女が本音をこぼしやすい寝起きを狙って、その真意を直接問うてみたのだ。今考えれば我ながら大胆な事をしでかしたと思うが、俺は運良く彼女の真意を知る事ができた。彼女曰く、

『大きな声出すの面倒くさいし、なんつーかその……恥ずかしいんだよ』

ということらしいのだ。そんな理由で、と思うのはまあ俺が乙女心がわからないというのもあるだろうが……。とにかく、そんな話を聞いてしまった俺に当然と言ってもいい考えが浮かんだのだ。

彼女に声を出させたい、声が聞きたいと。

「はーっ……はーっ……」

焦らしに焦らされ、もはや息を荒げて身体を痙攣させるだけの望月。全身は汗でじっとりと濡れ、双丘の頂点は赤く尖って刺激を今か今かと待ちわびている。ちらりと彼女の足を見やれば、彼女から湧き出た愛液がスカートはおろかソファのあたりまでをも染め上げていた。

そろそろ頃合いだろう。そう思った俺は右手を彼女の胸から離すと、制服のポケットへと入れ、中身をまさぐる。そして俺がポケットから取り出したのはピンク色の卵形をした物体で、片方の先端からコードが伸びたものだ。それは俗にローターと呼ばれる代物。工廠の開発妖精さんに極秘に揮発してもらったものだ。妖精さんから受け取る時に、サムズアップされたので性能はいうまでもないだろう。俺はそれを左手に持つと彼女の震える頂点に優しく押し当てる。

「んあぅ……」

昂った身体にはローターのひやりとした感触も十分な刺激になるようで、押し当てた瞬間、望月は少し大きく身体を身じろぎさせる。

「焦らさせて悪かったな望月。今、楽にしてやる」

「え……？」

俺の言葉に望月の気が緩んだその瞬間、俺はためらいなくポケットの中のスライドスイッチを、可能な限り真上へと動かした。そしてそれはすぐに、彼女の先端に当たっている本体に強力な振動となって襲いかかる。

「つっ！？　あああああああああああ！？！？」

持っている俺の指ですら、下手をすると落としてしまいそうな振動だ。それを限界まで焦らされた性感帯に直撃させられたのだ。彼女はガクガクと大きく身体を震わせて、もはや悲鳴に近い嬌声を部屋に響き渡らせる。

「まっ、あぅっ、それとめっ、てぇっしれっ……んあっ！」

左右の乳首にローターを交互に当てながら、もう片方の空いている方には指先でコロコロと先端を動かして刺激を与える。位置を切り替えるたび、彼女の善がり声が俺の耳を甘く溶かしていく。

「ほら、いいのか望月。可愛い声が丸聞こえだぞ？」

「っ……！　んふっ……ふあっ、んくぅっ、あっ……！」

きっと俺の顔には、さぞ悪い笑顔が浮かんでいるのだろう。俺がそう言うと、望月は震える両手で口を押さえ必死に嬌声を抑える。が、手が震えているのもあるだろうが、溜め込んだ快楽欲求がそれを許しはしないのだろう。声を押し殺し切ることができずに、幾度となく甘い声が彼女の口から漏れ出す。

「し、れい……あっ、も、ダメ……っ！　イっちゃ、イっちゃうからぁ……っ！」

と、絶頂を迎えるのも堪えているのか、目を固くつむり声までも震わせて懇願する望月。そろそろ頃合いだろう。そう思った俺は彼女に呼びかける。

「そうか……。――今、イかせてやるからな」
刹那、俺は遊ばせていた左手で彼女の左胸の突起をつまむと、くい、とつまみを回すように軽くねじりあげた。
「っあ！？！？　あああああああああああっっっ！！」
そして今日一番の嬌声を上げながら、望月は身体を大きく弓なりにしならせる。深い深い絶頂を迎えたようで上下に激しく身体を痙攣させ、股からは今まで見た事もないほど多量の蜜を吐き出している。
「あ……あ……」
時間にすれば数十秒ほどだっただろうか。激しい痙攣は落ち着き、望月はドサリとその肢体をソファに投げ打つ。が彼女は今も時折ピクリと身体を震わせ、うわごとのように口から声を漏らしている。
そして、恐らく何か変なスイッチが入っていたのだろう俺も、その彼女の惨状を見て少し頭が冷えた。
「……やりすぎたっ！　望月、大丈夫か！？」
そして俺は慌てて望月に声をかけ、頬を軽く叩いたりを身体を揺すったりして彼女を呼び戻す。
「んっ……大丈夫だから、あんまゆすんないっで……」
俺が数秒ほどそうしていると、望月は若干声をうわずらせ、そう言って身体を起こす。さっきの攻めがまだ尾を引いているのだろう。
「すまない、望月。俺の身勝手で方的な行動で望月を苦しめてしまった……」
「別に、いいよ……。あたしが声出さないせいで、司令官が嬉しくなさそうなの……薄々わかってたかんね。あたしだって、絶対に出したくないって思ってるわけじゃねーし。でもやっぱりさ、その……恥ずいじゃん？　だからさ、ちょっと強引だったけど、声を出させてくれたことは特に気にしてないんだよねぇ」
望月がそう言ってくれて、俺は少し気が楽になった。が、『ことは』ということは他に何か気に障ったことがあるのだろう。
「あたしが嫌だったのはさ、それでイかされたことなんだよねぇ」
そう言って彼女が指さすのは、俺が未だに手に持っているローターだった。
「せっかく二人でこういうことしてるんだからさ……。……そのさ。イ、イく時は、司令官のでイきたいんだよ……」
そして彼女は照れ隠しか目線をそらして俺に手を伸ばし、触れてそう言ってくる。そしてその言葉と望月の仕草は俺にとって最大の赦しであると共に――最高の起爆剤だった。
「司令官、それ……」
「す、すまない」
自覚はしていたが、望月に指されそちらを見ると、俺のモノがズボンを持ち上げてテントを張っている。
「相変わらずわかりやすいねぇ、司令官はさ」
「ぐ……」
ぐうの音も出ない。きっと今俺は苦虫を噛み潰したようなひどい顔をしているのだろう。それを裏付けるように、望月は苦笑して言う。
「……いいよ。司令官の好きにしなって」
「だが……」
正直な話、今望月を抱いてしまえばさっきと同じように自分が暴走して望月にまた辛い思いをさせてしまうのではないだろうか。
「あのさ……。さっきさんざんやられたのに、まだ身体、火照ったまんまなんだよねぇ」
俺がそう考えて押し黙っていると、そう言って彼女が少し身動ぎする。すると、クチリと小さくスカートの中から水音がする。よく見てみると彼女の双丘の蕾は、まだはっきりとその姿を自己主張していた。
「今度は、司令官は大丈夫だってあたしは信じてる。後さ、今こうやって司令官と話してるけど、割ともう我慢の限界なんだよねぇ……。だから今もし司令官がここで止めたとしても、あたしが司令官を襲う」
その言動に思わず彼女の目を見ると、彼女もまっすぐに俺を見返してくる。ああ、これは本気の目だ……。
「それにさ、司令官もそれじゃ苦しいだろ？　だからさ――」
そこで言葉を区切って、望月は俺に笑いかけて言う。
「今度は司令官ので、あたしをいっぱい気持ちよくして？」
望月のその言で、俺の躊躇いと幾ばくかの理性は、完全に吹き飛んだ。
俺はゆっくりと彼女のスカートをめくり、もはやその役目を放棄した下着をためらうことなくスルスルと下ろしていく。

「あ……っ」
今の彼女には少しの変化も刺激になりうるようで、ピクリと身体を震わせて声を漏らす。そうして彼女の秘部を覗いてみると、そこはすでに幾度となく達した際の彼女の大量の蜜で怪しくてらてらと光り、俺を誘っていた。
「あんままじまじ見ないで早くしてって。は、恥ずいから……！」
そんな望月のか細い声が頭上から降ってくる。それと合わせて目の前に広がる光景で、頭の中に今すぐ自分のモノでここをぐちゃぐちゃに掻きまわしてやりたいという悪魔のささやきが聞こえるが、それを俺は最後の理性をかき集めてねじ伏せる。そして俺はズボンとパンツをはやる気持ちを抑えて下ろし、だらしなく先走りを垂らす自分の息子を解放すると、彼女の割れ目へと優しくあてがう。ここまで濡れていれば、ほぐさずとも十分に挿入できるだろう。
「んぅ……っ！」
先端が望月の入り口に触れたことで、また彼女が小さく身じろぎして声を上げる。俺と彼女の秘部同士がこすれ、淫靡な水音を立てた。
「いくぞ、望月」
「……おっけ。いいよ、司令官」
そして、彼女がしっかりと頷いたのを見てから、俺はゆっくりと彼女の膣中へと俺の息子を突き刺してゆく。
「あっ、はいって、んんんんんっ！」
「ぐ……おお……！？」
と、望月の膣中に息子を割り挿れた瞬間、彼女が痛いほど俺を締め付けてきた。不意打ちの攻撃に危うく暴発しかけたが、歯を食い縛り気力で耐えた。
「挿れただけで、イったのか……？」
「だからっ……言った、じゃん……。我慢の限界、ってさぁ……！」
そう呼吸を荒げて途切れ途切れに喋る望月。彼女の膣中は俺の息子を溶かそうかというほど熱く、今もぎちぎちと俺を締め上げ、襞は俺から種を搾り取ろうとうねうねと蠢いている。気を抜けば瞬で果ててしまいそうなほどの気持ちよさだった。

「……動くぞ」
彼女の呼吸が比較的落ち着いたのを見計らい、俺はゆっくりと肉棒を抜き、再び刺し挿れる。
「はあ……っくうっ！」
そのまま二度三度と往復するたび、望月は声をあげて身体を震わせる。どうやら数回俺のモノを挿しこまれるたびに軽く達しているようで、その度に彼女の熱い壁に息子が攻め立てられる。このままでは彼女が深くイく前にこっちがイかされる。そう思うと、自然と抽送のスピードが早くなっていく。
「んふっ、しれ、いっ、あっ、もっと……っ！」
と、射精感を必死にこらえて抽送を繰り返していると、望月から喘ぎ声まじりのそんなリクエストが飛んでくる。ただでさえ限界に近いこの状況でそんなことを言われては、俺の理性が持つわけがなかった。
「後悔するなよ……っ！」
最後にそれだけ言い残して、俺は望月と快楽を貪るために全力で彼女の膣中を削り、彼女の膣奥に肉棒を突き立てていく。
「んふぁ！　おくっ、きもちっ、よすぎてっ！　こえ、あ、がまんっ、できな、んんっ……！」
彼女も膣奥にモノが当たるたびにイっているようで、先ほどに近い大きな声をあげ、ガクガクと身体を震わせる。
そうした獣のごときまぐわいがどの程度続いただろうか。抽送の勢いでごまかしていた噴火の我慢に、ついに限界がきた。グラグラと煮えたぎるマグマが今にも飛び出そうと息子を震わせる。
「ぐうっ……！　望月、俺ももう……！」
「いい、よっ！　あたし、もっ、ああっ！　おおき、いの！　きちゃうからっ！」
彼女もその時が近いようで、大きく鳴きながら俺を今まで以上に締め上げ、射精へと導いていく。
「膣中に、出すぞっ！」
それだけをかろうじて叫び、俺は最後の一発を彼女の膣奥に力の限り叩き込む。
「ぐっ、おおおおおお！！！」

そして、溜め込んだ快楽と共に俺は俺自身の噴火のマグマを、彼女へ叩きつけた。
「っ……！　あああああああああああ！！」
その直後、望月も深い絶頂へ至ったようで、際大きく声をあげて彼女の全てがあらん限りの力で、俺から子種を得ようと物を絞り上げる。
「あっ……。あついの……いっぱい、出てるぅ……」
彼女の言葉の通り、俺の射精は止まる気配を見せず、今もまだ彼女の子宮へと子種を吐き出し続けている。
「ふぅ……。……抜くぞ」
やがて数十秒ほどしてようやく射精が収まり、俺はゆっくりと肉棒を望月から引き抜いた。直後、彼女の秘裂からはまるでドロリという擬音が聞こえるほどに大量の白濁と愛液が溢れ出してくる。
「はぁ……はぁ……。司令官、出し過ぎだっつーの……」
「すまん……。まさかこんなに出るとは思っていなかった……」
普段それなりに溜まっている時に望月とやっても、ここまでの量にはならなかった。それほどに今回の彼女との行為は俺の身体にとっては最高の快感だったのだろう。そして、それゆえに俺には望月への不安が残る。
「望月、その、気持ちよかったか……？」
「……これでそう見えないんなら、あたしは司令官を明石さんのところに連れていくよ」
「……それもそうだな。それと望月、次から無理して声出さなくていいからな。お前が気持ちよくなれて初めて――」
「あのさ、司令官」
彼女の本音が聞けてとりあえずほっとすることができた。が、俺がそこまでいったところで、急に望月に話を遮られる。
「今まであんまり声出さなくて、すごく恥ずかしかったんだけど……。さっきのでちょっと恥ずかしさも吹っ飛んだみたいだからさ。その……変な声出すかもしれないけど、気にしないでおいて……な？」
「本当か……？」
その望月の赤面と共に発してくれた言葉は、俺にとって最高のご褒美だ。喜びで舞い上がると共に、これからの行為でそんな声を聴くことができると思うと興奮――したところで踏みとどまろうと思ったが、遅かった。
「……あのさぁ……」
「……すまん」
そこには先ほどよりも若干スケールダウンしたものの、しっかりと息子が雄々しくそびえ立っていた。それを見て、望月は呆れたようにため息をつき、そして笑う。
「しょうがねーなぁ……。追加夜戦……する？」
「……喜んで」

文月と朝から夜戦！

うっちー

「ん……んぅ……」

カーテンから漏れ出るお日様の光と、重くのしかかる温かいお布団が、今日もあたしに一日の始まりを告げる。時刻は七時で、いつもなら鎮守府中の艦娘がお仕事を始めたり訓練を始めている時間。けれども、今日は静か。そう、今日はお休みの日。

「……ふふっ」

あたしの隣で寝てるしれ～かん。いつもは早起きしてお仕事を頑張ってるから、しれ～かんの寝顔なんて滅多に見れないんだけど、今日は特別。あたしがしれ～かんの寝顔を独占できる日、なんだか幸せ。

せっかくの休日とはいえ、何をするかなんて全然考えてない。いつもお仕事が忙しいから、お休みのことなんてあんまり考えられなくって。でもそうだなー。しれ～かんとたくさん楽しいことが出来たらいいな……♪

「ね？　しれ～かん……♪」

幸せそうに寝てるしれ～かんの頬を、つん。やっぱりちょっと触ったらいじゃ起きそうにないけど、こんなに無防備な姿を見せられちゃった、何だか悪戯したくなっちゃう。ちょっとくらいなら、いいよね？

しれ～かんの上に、重なるように乗っちゃう。しれ～かんの身体大きい、から、あたしが乗っても全然余っちゃう。

「おじゃまし～す……ん♪」

そっと、しれ～かんにキス。こういうドキドキすること、やってみたかったんだ……♪　しれ～かんは男の子だけど、何だか眠り姫みたいだね。

「ん……？」

「あ、起きた？　おはよ、しれ～かん♪」

普段はしれ～かんもきっちりしてるけど、さすがに寝起きの顔はちょっとだらしないの。でもそのいつもと違う感じが可愛くて、見ていて何だか楽しい。

「文月……何で俺の上に？」

「えへへ、しれ～かんの寝顔が可愛かったから♪」

「へぇ……？」

しれ～かんがいやらしい笑い方してる。こういう時って大体何かえっちなこと考えてるんだよね。顔に出てるもん。

「しれ～かん、なに考えてるのよ～」

「ん～？　だって文月の方から俺に抱きついてくれてるし、　これはもう期待に応えるしかないと思って」

「む、期待って……んぐっ！？」

し、しれ～かんのキス……！　強引で、激しくて、これじゃあしれ～かんのされるがままだよぉ……でも、嫌じゃない。しれ～かんの舌が入ってくる。激しいのに、優しくて、このまま全部しれ～かんに任せちゃう……

「ぇあ、ひれぇ……ひゃ……んむ！」

頭の中が、真っ白になっていく。しれ～かんの舌が絡まるたびに、どんどん体中が気持ち良いのでいっぱいになって、ちょっと触られるだけで、びくってなっちゃって。

「……文月、すごい顔してる」

「ふぁ……だ、だって、しれ～かんが、ふぁあぁぅぁぅぁ……」

「もう言葉にもなってないな」

もう自分が何を言おうとしてるのかも、分かんない。体に力が入らなくって、しれ～かんにぎゅってされたまま、何にもできない。

「な、文月」

「ふぇ……？」

「今日は休日だろ。せっかくだし、目一杯気持ちいいことしようか」

今みたいに気持ち良いことを、ずっと……？　しれ～かんとえっちなことをするのは好き。カッコカリでもあたしはしれ～かんのお嫁さんだし、あたしだってそういうことしたい。ただ、今日のしれ～かん、いつもより元気だから……

「あたしの身体、もつかなぁ……？」

「そこは文月の本領発揮だな」

「ふふ、どきどきしちゃうね……♪」

「ここでするの……？」
「嫌だった？」
「ううん、ちょっと怖いけど、すごく興奮してる！」
いつもお仕事をするために使っている執務室。そんなところに、パジャマも着替えずにあたしたちは座っている。いつもみたいに椅子に座るしれ～かんと、そのお膝の上にあたし。
ドアには鍵が掛かっていないから、いつどの艦娘が入ってきてもおかしくないけれど、それがスリルになってもうどきどきしてる。
「しれ～かん、ちゅーして……❤」
何だかしれ～かんとキスしてると体中の力が抜けちゃって、あたしのすべてがしれ～かんのものになっちゃう。あたしの身体が、しれ～かんを受け入れちゃってる。
「ん……しれ～かんって、おっぱい好きだよね……♪」
しれ～かんの手が、あたしのおっぱいを優しく撫でる。あんまり大きくないから恥ずかしいんだけど、しれ～かんは優しく触ってくれる。あたしの気持ち良いところを、全部知ってくれてる。
「
「ん……文月、もう我慢できなくなった？」
「そ、そんなこと……」
「でもここ、一人でずっと弄ってる」
あたしの右手を、しれ～かんが掴む。ほんとはキスしてる間に身体がずっと疼いて仕方なくて、いつの間にかおなにーしちゃってた。あたしの右手はもうぬるぬるでいっぱいになってた。
「だって、しれ～かんが意地悪するんだもん……♪」
「意地悪なんてしてないよ」
「してるよ～、いつもより触り方がえっちで、あたしずーっと焦らされてる」
「じゃあ、もうしちゃう？」
ずっとえっちしたいって思ってるのに、いざこう言われると緊張しちゃって、しれ～かんの顔を見るのも恥ずかしい。
「……うん」
「よく言えました」
「ひゃあっ！？」
あたしの身体が、ひょいって持ち上げられる。急にそんなことされたら、びっくりしちゃうじゃないの～！
「挿れるよ」
「あ、その……うん、えっと……」
あたし、今からしれ～かんとせっくすするんだ。もうすっごく胸がどきどきしちゃって、恥ずかしくて顔があつい。多分、今真っ赤になってるんだよね。心の準備も出来てないから、ほんとはちょっと待ってほしいんだけど……
「……優しくしてね」
あたしの身体は、それ以上に早くせっくすしたくて限界だった。
「はっ……ん、くっ……うぅぅ！」
しれ～かんのおっきいのが、あたしの膣内に入って……！
「……大丈夫か？　文月」
「はぁっ……はぁっ……ちょっと、待って……？」
やっぱりしれ～かんの身体、おっきいから……ん、あたしの、身体じゃ……あうっ、ちょっと、やばいかも……！
「待たない」
「ふぇっ、っあ！？」
ちょっと、しれ～かん……いきなり動かないでよぉ！　今、変な声出ちゃった……外に聞こえてないよね……？
「ほら、口隠さないの。気持ちいいならいっぱい声出していいんだよ」
「んっ、そんなのっ、できないっ！　ば、ばれちゃうからぁ……っ！」
しれ～かんに口元を隠していた両手を抑えられて、あたしの声が、息が、執務室に響く。恥ずかしくて、泣きそうになって、それでもしれ～かんはケモノみたいにあたしを犯してる。
「誰もいないんだから誰にもばれないよ。ドアの前まで行ってみる？」

「待って！ それだけは……ひぅぅっ！？」
あたしが何と言おうと、お構いなし。しれ～かんはおちんちんが挿入ったままのあたしを軽々と持ち上げて、両手を扉にあてがわせた。
「じゃあ続き、しようか」
「しれ～かんの、きちくっ！」
嬉しそうな顔をするしれ～かんに、必死の抵抗。のつもりだったんだけど……
「お、そんなこと言うのはこの口かな？」
逆効果……だったみたい。
しれ～かんの指が、あたしの口の中に入ってくる。
「ひゃう……」
「文月は口の中も弱かったよな」
「うぅ……ぁぅ……」
口のなかも、おっぱいも、あそこも全部、しれ～かんでいっぱいになって。もうしれ～かんのことしか考えられなくなっちゃってる。
「ひ、ひれ～ひゃん……」
「ん？」
「もう、ずっと気持ちいいの……気持ちいいから……あたしを、イかせてぇ……」
「っ♪」
きたっ、きたぁっ！ しれ～かんのおちんちんが、あたしの膣内に、いっぱい、いっぱいきたぁっ……！
「しれぇ、かんっ……んくっ、もっと、もっとしてぇっ！」
しれ～かんに、えっちなとこ全部触られて、身体中全部気持ちよくなって……もうそれだけで幸せで……っ
「おっぱいも、あそこも、もっと触っていいからっ！ しれ～かんの、したいこと、いっぱいしていいんだよっ……！ 激しくていいから、もっともっと、気持ちいいことして！」
もう何も考えられない。気持ちいいのが欲しい！ しれ～かんが欲しい！ 全部全部、あたしの中に欲しいの！

「んっ、あぅっ、んぁっ、ひぅぅっ！」
気持ちいいのがくる……この感じ、だめ……きちゃう……っ！
「しれ～かん……！」
「文月……！」
執務室の中で、裸で、しれ～かんに犯されて、あたし、あたしぃっ、イッちゃ……！

コツン……コツン……
『島風――！ 島風、どこにいるの――？』
コツン……コツン……
『んー、なかなか見つかりませんねぇ』
『そもそも鎮守府なんてだだっ広い場所でかくれんぼなんて、探すのが面倒くさいったらありゃいないわ。雪風、手分けしましょ』
『了解です！』

「はっ……はっ……！」
今の声……天津風ちゃんと、雪風ちゃんの声だ……！ 扉のすぐ向こうに、いる……！
「続けるよ、文月」
「っ！？ し、しれ～か……！」
何考えてるのよぉ！ そんなことしたら、いくら静かにって言っても音が聞こえちゃうに決まって……！
『ん～……やっぱり隠れるなら執務室、ですかね？』
「はぁっ……はぁっ……」
お願い、聞こえないで……！ んっ、しれ～かんの、おちんちんの音、聞こえないでぇっ……！ 声も、我慢するからっ、雪風ちゃんに、聞こえないで……！
「静かにね、文月」

「は、んっ……うんっ……！」
お願い……！ 早くあっち行って……！ じゃないと、イッちゃいそうなの……声も我慢できなくなっちゃう、それに……
「しれ～かん……っ！」
「しーっ」
「違うの、あたし、あたしいっ……」
『今日はお休みだから、しれえもいませんよね……なら、勝手に入っても怒られないでしょうか……』
「おしっこ、漏れちゃいそう……っ！」
気持ちよくて、イキそうになって、ずっとおしっこしたかったの……！
まさか、こんな時に雪風ちゃんと天津風ちゃんが来ると思わなくて……我慢できなくなっちゃうかも……！
コツン……コツン……
『しーまかーぜさーん』
コツン……コツン……
待って……お願い、あたしもう力が入らなくて……っ！ 扉開けられたらばれちゃうっ……！ 恥ずかしいの、全部見られちゃうっ……
トン、トン。
『雪風です。しれえ、失礼しまーす！』
待って――
『雪風―、執務室は勝手に入らないってルールだったでしょー？ 後で怒られても知らないわよー？』
『あぁっ、そうでした！ 雪風、もう一度下の階を探してきます！』
『ん。じゃあ私は外を探してみるわ』
コツン……コツン……
「はぁっ……はぁっ……行っ、た……？」
足音が、聞こえなくなった。一時はどうなることかと思ったけど、これで安心してトイレに……
「ひうっ……！？ し、しれ～かん……？」
「危なかったね」
「び、びっくりしたぁ……ば、ばれちゃうかと思ったよぉ……」
「でも、もういなくなったし、これで気にせずできるね」
「え、ちょ、ちょっと待って、待ってってばぁっ……！ おしっこ！ おしっこ漏れちゃうからぁっ……！」
しれ～かんの、変態っ……！ トイレに行かせてくれないんだ……このまま、あたしにおもらしさせる気なんだ……
「文月の恥ずかしいところ、全部見たいな」
「もう、知らないからぁっ！ しれ～かんの、ばかっ！」
「ほら、力抜いて」
「～～～っ！ 気持ちいいの、きちゃうっ！ 力抜いたら、漏れちゃうっ！ でも、でも、気持ちいいのっ！ もう、何も考えられなくなっちゃう！」
おしっこ、我慢してたけど、もう、何が何だかわかんなくなっちゃって……ただ気持ちよくて……もう、もうっ……
「だめっ、しれ～かん、イッっちゃう！ イッちゃう！」
「俺も……くっ、射精る！」
「く、ひうっ……あああああっ！」
しれ～かんの、せーえきがっ……膣内に、出て……！
だめ、気持ちいいのが、頭の中に、ぜんぶ、ぜんぶきもちよくて……なにも……わかんなく……
「ふあぁ……おしっこ、漏れちゃった……ぁ……」
おしっこ、気持ちいいよぉ……あぁ、執務室のお外まで広がって……

「はぁ……はぁ……文月……」
「し、しれ～か……ん……」
「……寝ちゃったか、ふふっ」

……

……

……あれ？
「あたし、何して……」
あたし、何してたんだっけ。お布団の上で起きたってことは、今は朝？
いや、そんなことないよ！　だってあたしはさっきまでしれ～かんと……
「あ、文月、よく眠れた？」
起き上がると、しれ～かんが隣から優しく頭を撫でてくれた。
「ごめんねしれ～かん！　あたし、寝ちゃってて……」
「いいんだよ。ちょっと片づけは大変だったけどね」
「片付け……あ」
そうだ、あたし、おもらししちゃって……
「でもあれは、しれ～かんのせいじゃないの～！」
「ばれたか」
「む～」
「はは……それで、これからどうする？　疲れただろうし、もうひと眠りするかい？」
今日は一日お休みで、まだまだ時間は沢山ある。やりたいことは沢山あるけれど、あたしは……
「ううん、それより……」

「お布団の中でもう一回、しよ♪」
あたしはすっかり、しれ～かんとのえっちにハマっちゃったみたい。

睦月型えっち合同誌主催･企画
めんていやくなのあとがき

睦月型えっち合同誌を読んで下さりありがとうございます。
主催や編集や表紙絵やマンガもしました。めんていやくなです。

この合同誌を企画したのにも理由がありまして。
睦月型の成人向け合同誌と、睦月型だけでもコアだと思うんですが
艦これの同人イベントで成人向けの睦月型エロ本って
なかなか出ないんですよね。(睦月型は逆に一般向け本が多かったり。)

自身でも皐月ちゃん本を出したのですが、ある日
『睦月型が好きな絵描きさんの規模であれば合同誌で収まるかも』と
とっさに思いつきました。

睦月型って「１人と恋愛」というよりは「睦月型で家族」ってイメージが強いんです。
でも、それでも！睦月型のえっちが見たい！という高ぶりで
急遽、企画を立てて、募集して46人の参加者を集うことが出来ました。

参加していただいた作家さん46名の方々、本当にありがとうございます。
皆さんの原稿をみながらハスハスしてました。
純愛H･おしおきH･百合、ギャグや小説も、編集しながら楽しませて貰いました。

睦月型という子たちのえっち合同誌が出来たことに
私自身、とても満足しています。

今年は１１人目の睦月型、水無月ちゃん実装されましたし
１２人目の夕月ちゃんがくるのをが楽しみです。その時は…それでは。

世に睦月型のあらんことを。　　めんていやくな

■睦月型えっち合同誌の参加作家様(掲載順)

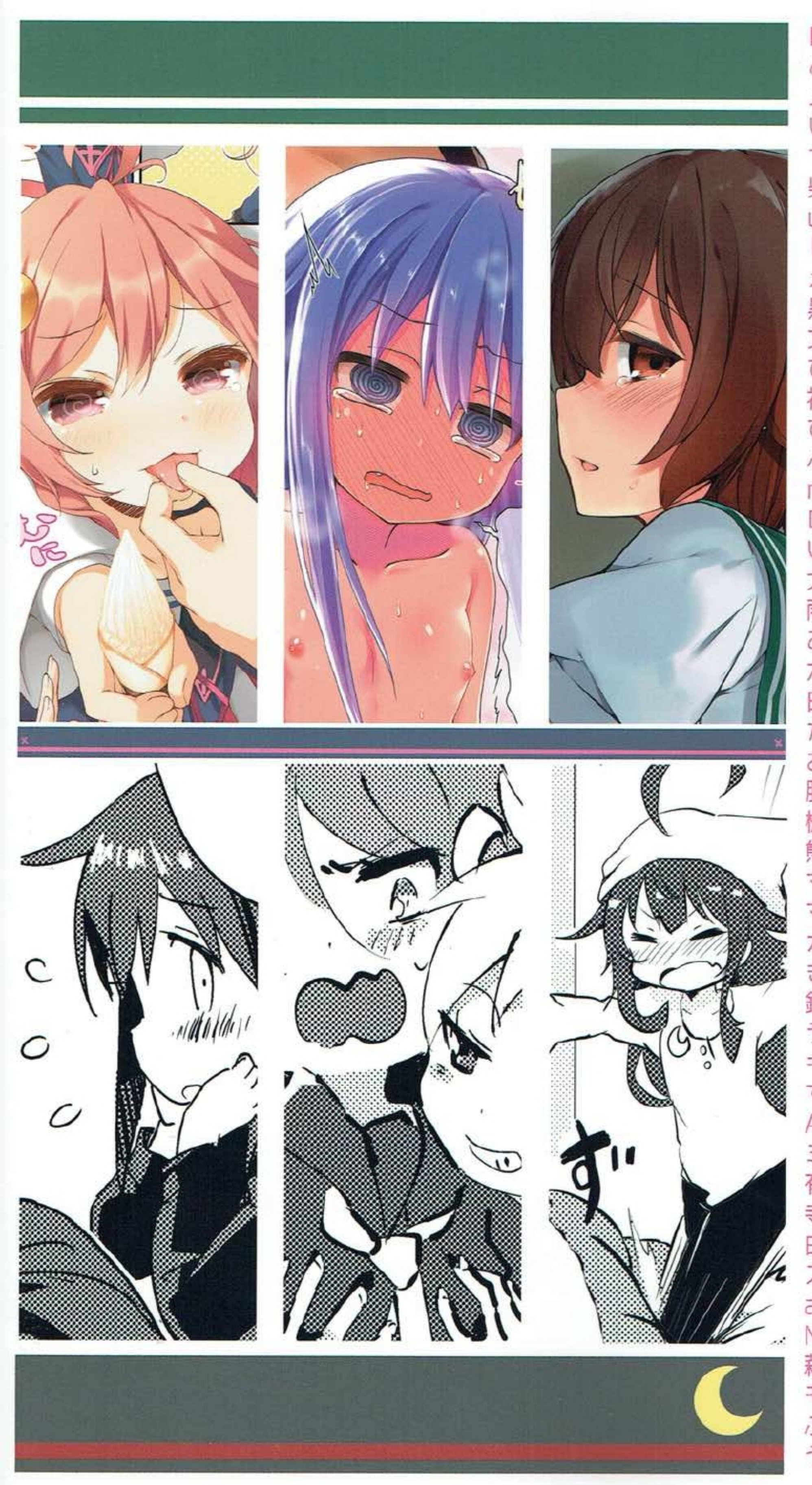
ユメのオワリ･いまち･黒咲まんぼう･文釣遠瑠･えりある･ひほり･祷
ひなつきましろ･ふれぁ･すか･mou S･us･しはちろ･めんていやくな
ロリコントラップ･いそぽ･大阪屋うろ･雨美すずめ･あとのまつり
六日･白端みずち･たーごいる･おちょん･豚たまこ･楓蛙
熊灯ツムギ･マンガをうｐする人･マルム･柴犬きせつ
カイチョー･ぎよん･鈴鷹美樹･ラムネ･キンニック
すずかぜそら･Alt+4･ミュウ･有葉米太･寺田･白狼姫
ステルス･azumaya･NUUNO･萩鷲･モフースキー
ふらふらっぐ･うっちー

ご参加いただきありがとうございます！

奥付

『睦月型えっち合同誌』
発行日：２０１６年１２月２９日(コミックマーケット91)
発行者：めんていやくな(mail:mentei897@gmail.com twitter:mentei897)
印刷　：プリペラ印刷様　タイトル筆字：やま先生(twitter:komaguchi)

この本の未成年の閲覧や購買禁止。違法アップロードサイトへの無断転載禁止。



■参加者
めんていやくな
ユメのオワリ
いまち
すか
柴犬きせつ
US
しはちろ
えりある
黒咲まんぼう
文釣遠瑠
ひほり
祷
ひなつきましろ
ふれぁ
mou S
ロリコントラップ
いそぽ
大阪屋うろ
雨美すずめ
あとのまつり
六日
白端みずち
たーごいる
おちょん
豚たまこ
楓蛙
熊灯ツムギ
マンガをうpする人
マルム
カイチョー
ぎょん
鈴鷹美樹
ラムネ
キンニック
すずかぜそら
Alt+4
ミュウ
有葉米太
寺田
白狼姫
ステルス
azumaya
NUUNO
萩鷲
モフースキー
ふらふらっぐ
うっちー